機動戦士ガンダムＳＥＥＤ－ブーステッド－

ニーチェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ－ブーステッド－

【Ｎコード】

Ｎ５３５９Ｃ

【作者名】

ニーチェ

【あらすじ】

ＣＥ７１年。連合軍に所属するブーステッドマン『クロト・ブエル』の視点から描く、もう一つのガンダムＳＥＥＤ。戦いを好み、戦いに生きた彼の本当の内心は？３人との本当の関係は？そんなＩＦ小説

第一話『序曲』

少年が泣いている。

冷たくなった死体。

破壊された屋敷。

その中に一人の少年が泣いている。

赤い髪の毛。小柄な体。

「母さん！母さん！」

何度も冷たい手を握り叫ぶ。

しかしそれはもう動かない。

「母さん！何で？母さん・・動いてよ！ねぇ？また僕を・・僕を一人には・・」

何度呼んでも、彼女の体は動くことすらなかった。

そして彼は気づいた。

（ああ・・また一人ぼっち）

少年はただひたすら己が置かれた状況と孤独感を感じ

涙を流すだけだった。

「いたぞ！！あれだ！？」

少年は声がした方向を向くと、そこには武装した兵隊が3、４人彼を囲み
持っている銃で激しく彼の頭を叩いた。

放心状態だったのだろうか。
何も思い出せない。
何をされたんだ？

周りを見渡すと変な実験器具が大量にあった。
ここは病室なのか・・・？
体が痛む。体中が軋む。
痛むが体は動く。右手の指。左手の指も。
腕、足、首、肩・・・全部動く。
体には何も拘束されてない。
でてもいいのか？
まぶたが急に重くなってきた。
彼はは二度目の眠りについた。
少年の名前はクロトと言った。

「コーディネーターを殺しましょう。コーディネーターは人類の敵です」

薄暗い大きな部屋に子供が机にずらりと座って並び、パソコンの画面を見ている
頭にヘッドフォンをつけ、目の下を真っ黒にし、集中して画面を見る彼。
少しでも目をつぶれば、部屋を周回している兵士が来て殴られ起こされる。
もしくは軽い電撃が走り起こされる。
声すら上げることが出来ない体が彼を苦しませた。

再び彼は目を開ける。

「また・・昔の夢か」

毎日毎日、彼は夢を見た。
幼少時の幼い記憶。横たわる母親。体中につけられた実験器具。
薄緑色の病院服を着て、毎日パソコンを見る。

「コーディネーターは抹殺しないとね・・」

彼はつぶやいた。

第一話『序曲』（後書き）

本当に最後まで読んでくれて、ありがとうございました。

２００７年８月２０日　ヒソカ

第二話『お仲間』

「ここがお前らの部屋だ」

中年の仕官がそう言った。
部屋は狭い。大体、六畳くらいの部屋だと思う。
注目するべき物が二段ベット二つだけ。
部屋自体は明るかったが何か、殺風景だ。
俺は黙ってその部屋の隅に荷物を置いた。
俺は、適当なベットの上に横になった。

「ふぅ・・殺風景な部屋だぜ。」

息苦しい感覚もあったが、逆に良かった。
初めての経験だったからだ。
クロトの他にも二人、自分と同じ服を着た男女が入ってきた。
一人は大人びた顔つきで触覚のような髪の毛をしていて
目を軽く細めて、小説を読んでいる。
もう一人は、緑色の髪の毛をしてて
目にくまが出来ている。
耳にはイヤホンをあてているから
音楽を聴いているのだろう。
そのイヤホンから出る音がものすごく大きい。

（ちっ・・うるせぇな。）

小説を読んでいるやつが、壁に寄りかかる。

もう一人のほうはベットに座るどころか、床に体育座りのように
座った。クロトの方をジーっと見ている。

（うへぇ・・うす気味悪いぜ・・・暗い奴らばかりでよぉ。）

しばらく三人は沈黙していた。
しかし、クロトは沈黙に耐えられなかったのか
自分の荷物から携帯ゲームを取り出して
音量をすこし上げて遊び始めた。
カセットはグラディウスのようなシューティングゲーム。
グラディウスとは自機が戦闘機で宇宙空間に
潜む兵器を倒してそのエリアのボスを倒していくといった、
簡単なゲームである。しかし、以外にシビアなゲームで
敵の攻撃に当たると自機は大破する。
ゲームにはコンティニューライフというものがありそれが無くなると
ゲームが終了する。
しばらく、ゲームに浸るクロト。
しかし、触覚の髪の毛をした男が本を読み終わったのか、
本をパタンと閉め、自分の荷物の中に閉まった。

ドーン。

「あ～あ・・やられちゃった・・・」

それはクロトのゲームから発した音だった。
どうやら自機が破壊されてゲームオーバーになったらしい。

「くそぉ！こんどこそ・・・ん？」

クロトの前に影が出来た。

クロトは携帯ゲームの電源を切ってそっちの方を向いた。
さっきから音楽を聴いてる男がこっちを見てた。

「・・・・・」

「・・・・何だよ？」

その男は黙ってこっちを見てる。
そして口を開いた。

「お前・・名前なんていうの？」

「ク・・・クロト・・」

クロトは焦った。
何をされるかと思えばいきなり名前を聞かれたからだ。
クロトは聞かれたままに答えた。
クロトも自分にも聞かれたから、こいつにも聞いてみよう、と思って

「君、何ていうんだ？」

「シャニ・・・」

「シャニ・・・って言うんだ・・ヨロシク」

シャニはクロトの言葉に何も反応しなかった。
そして、クロトとは反対のベットに腰掛けてまた、音楽を聴き始めた。

（なんだよ・・）

クロトはもう一人の方に目が行った。
その視線に気づいたのかその男も自分の名前を言った。
「オルガ。」
（こいつらとは友達になれそうにねぇな）
クロトは思った。

第三話『初陣』

クロトの搭乗するＧＡＴ－Ｘ３７０「レイダー」のミョルニルが
シャニのＧＡＴ－Ｘ２５２「フォビドゥン」のエネルギー偏向装甲
に当たる。
しかし、フォビドゥンは怯むことなく実弾兵器「エクツァーン」を
発射するが
レイダーの新型フェイズシフト装甲「トランスフェイズ装甲」によ
り効かなかった。

「ちっ・・」

シャニは舌打ちをすると、バックパックにマウントされている
エネルギー偏向装甲に装備されている、
誘導プラズマ砲「フレスベルグ」を発射する。
それに気づいてクロトはレイダーを変形させ逃れようとするが
追跡するビームに逃げられなかったのかＭＳ形態に変形を戻し、
連装機関砲についてるシールドで防御した。
しかし、「フレスベルグ」の威力は高いのか
アンチ・ビームコーティングされた盾は少しだけ溶けた。

「何やってんだよ、ボケぇ。」

オルガが茶化す。

「オルガ！黙ってろ！！」

「へっ！こいつで決まりだぜ！！」

オルガの搭乗機「カラミティ」の二連装ビーム砲
「ケーファー・ツヴァイ」と肩に装備されてる
長距離ビーム砲「シュラーク」をフォビドゥンに発射する。
しかし、フォビドゥンのエネルギー偏向装甲
「ゲシュマイディッヒ・パンツァー」が展開されカラミティの
ビームは曲げられてあさっての方向に行く。
フォビドゥンに効かないのならレイダーに、と思ったのか
もう一度同じ攻撃をレイダーに向けて行った。
分かってたと言わんばかりにレイダーは変形しその攻撃を軽々と避ける。

「あたらないね！」

クロトは笑いながら言った。
クロトは地上にいるカラミティをほっとき、フォビドゥンに集中攻撃をする。
右手に装備されている二連装５２ミリ機関砲が火を噴いた。
フォビドゥンは左肩のエネルギー偏向装甲だけ展開させ
右手の機関砲「アルム・ファイアー」を発射する。
両者ともトランス・フェイズ装甲により攻撃が効かなかった。
しかし、クロトはこんなことは百も承知。目くらましに使っただけであったのだ。
そして鳥類に類似してるＭＡ形態に変形しフォビドゥンに一瞬で間を詰める。
何かされると思ったのかフォビドゥンは貝のように
エネルギー偏向装甲を展開する。
しかし、レイダーは何もしてこない。
恐る恐る装甲を開いていく。

「・・・・!?」

シャニが気づいた時は遅かった。
攻撃すると思っていたレイダーは下にいた。
レイダーのフェイスマスク、人間で言うと口の部分にエネルギーが込められるのが分かる。そして次の瞬間それは発射された。

「激・殺!!」

罵声のような奇声のような単語を発して１００ミリエネルギー砲「ツォーン」が
フォビドゥンに迫る。

「くぅ!」

シャニはペダルを全開にしてツォーンを避けた。

「おっしいいい!」

クロトが笑いながら言う。

「俺を無視するんじゃねぇ!てめえら!!」

カラミティのスキュラとシュラークを空中にいる二機に連射するが
フォビドゥンはGパンツァーを展開する。Gパンツァーでビームが曲がり
そのビームがレイダーの頭部をかすめた。

「あっ・・・ぶねえ!!気おつけろよシャニぃ!!」

「ブーーーー」

終了の合図が鳴る。そうすると三人の機体は止まった。

「ちっ・・・まだ楽しんでいないのによぉ」

オルガが愚痴をこぼす。

「お疲れ様です。皆さん」

スーツを着た男が言った。彼の名はムルタ・アズラエル。
ブルーコスモスの盟主である。
彼らを『所有』するオブサーバーでもある。

アズラエルが不敵に笑って言った。

「今までは、シュミレーションばかりでしたけど、
次が本当の実戦ですよ皆さん。楽しみにしてくださいネ」

数機ある巡洋艦「イージス」が海上をひたすら進む。
彼らが向かおうとしているのは、中立国「オーブ」。しかもそこは
秘密裏に五機のガンダムを
開発した「モルゲンレーテ」の軍事工場がある「オノゴロ島」である。
ブルーコスモスの盟主、アズラエルはモルゲンレーテの工場とマス
ドライバーを奪いにここを襲撃しようとするつもりなのだ。
マスドライバーとは宇宙に大量の物資を運ぶために考案された物で

ある。
なぜ、地球軍はここを狙うのか？それは地球連合軍はザフトにマスドライバーを奪取・破壊されたため、
オーブのマスドライバー「カグヤ」やモルゲンレーテ社の技術を接収するため協力を要請するが、
前代表ながら実権者のウズミ・ナラ・アスハは中立を貫く立場からこれを拒否した。それが災いを招いたのか、
オーブは地球連合に目をつけられたのだ。

足を組んで不敵な笑いを浮かべながらアズラエルは爪を切っている。

「ふふふ・・私に逆らうことがどうなのか、教えてあげますよウズミさん・・・」

パチン、と音が鳴りアズラエルの小指の爪が切り落とされた。

「ふふふ・・・」

パチン、パチン、と機体の機動させるスイッチを押すクロト。
クロトの画面に英数字が現れていく。

Ｇｒｅｓｓｏｒｉａｌ

Ａｒｍａｍｅｎｔ

Ｔａｃｔｉｃａｌ

ブーン・・、どんどんと浮かび上がっていく。そして徐々にレイダ

ーの機体が起動していく。

Ｇｅｎｅｒａｌ

Ｕｎｉｌａｔｅｒａｌ

Ｎｅｕｒｏ－Ｌｉｎｋ

Ｄｉｓｐｅｒｓｉｖｅ

Ａｕｔｏｎｏｍｉｌ

Ｍａｎｅｕｖｅｒ

「頭文字だけとるとガンダムか、へっ・・・」

完全にレイダーが起動完了した。そして、モニターにアズラエルの顔が出る。

「準備はいいですか、皆さん？じゃあ、はじめるとしましょう・・・」

（へっ・・いいように使ってくれるねぇ、このおっさん。）

「あ～・・それと君達、マスドライバーとモルゲンレーテの工場は残しておいてくださいね。事前にファイル渡しておいたでしょ？」

「へーへー。」

三人はここに来て初めて外を見た。そして一機づつ、オーブを目指して進む。
フォビドゥン、レイダー、カラミティといった順に出撃する。
が、カラミティには飛行能力が無い。そのため、レイダーが変形し、それを土台にするしかなかった。

「オルガ、乗るんじゃねぇ！！」

「タクシー代わりだろ？お前の機体はよ」

オルガが皮肉気な笑みを浮かべた。

「・・・・・」

一方、シャニは音楽を聴きつつ、目の前に映るオーブの港を目指す。

オノゴロ島が見えてくる。大量のＭ１アストレイが三人を迎えてくれた。

「みーんな壊していいんでしょ？」

不気味な笑みを浮かべてシャニは訊いた。

「ですね。」

クロトは楽しくそれに答える。

「うっせーよ、お前ら。」

二人の会話を耳障りと思ったのか、オルガが二人に吐き捨てた。
レイダーのツォーンが発射するのと同時にカラミティのスキュラも発射する。
二機のアストレイが一瞬にして破壊された。
続いて、フォビドゥンが2機のアストレイの真ん中に接近して、接近戦用武器「ニーズヘグ」を振り回し、
アストレイの頭部を破壊する。
あまりにも、一瞬のことだった二機のアストレイのパイロットは動揺しビームライフルを空中に向けて数発発射する。
これで撃破したとは言えないと思ったシャニはさらに二機のアストレイのコクピットをニーズヘグで貫く。
クロトは他の二人に負けたくないと思ったのだろうか、もう一機破壊しようと52ミリ機関砲を2門発射する。
しかし、アストレイは避けてかすらなかった。

「ひゅ〜。いい機動力してるじゃん、あっちのガンダムタイプ、なぁオルガ。」

「あ?」

たった1分もたっていなかっただろう。合計で4機のアストレイが撃破された。これが彼らの力。
クロトのモニターに新たな敵機が現れることが分かった。

「ん?なんだぁ?」

その機体は青色と白色に分けられた機体だった。そして、ビームライフルをクロトの機体に発射する。

クロトはローリングして回避した。だが、乗っていたカラミティは回転したため落下していく。

「まずはあの白いのだああ！！！！！」

オルガが戦いの鐘を鳴らす。シュラークとスキュラを同時発射する。シャニもそれに気づいたのか、白い機体に接近してニーズヘグを振り下ろす。しかし、避けられ、キックがフォビドゥンの脇腹に直撃する。

「くっ・・・」

機体のコクピットが激しく揺れたためシャニは体を大きく揺す振られた。
そして、さらにフォビドゥンにビームライフルを一発発射する。
しかし、フォビドゥンにはゲシュマイディッヒ・パンツァーによりビームがはじかれる。

「！？ビームが効かない！」

白い機体のパイロットが驚愕する。それと同時に横から強い衝撃が来た。
鉄球が直撃したのが分かった。

「へっ！こいつ、たいした事ないじゃん。」

フォビドゥンとレイダーは二機で狙いだした。しかし、地上にいるカラミティはフォビドゥンとレイダーに攻撃し始めた。

「何すんだ！？オルガ！！」

「てめぇもだ、シャニ！！！」

そしてフォビドゥンにも攻撃し始める。だがフォビドゥンはエネルギー偏向装甲でそれを防ぐが、
防いだビームがレイダーにかすめる。

「ちっ、シャニ！」

レイダーがフォビドゥンの方向を向いた瞬間、白い機体が実弾レールガンを発射する。そしてレイダーは後方に吹き飛ぶ。

「くそぉ！あの野郎！！！」

「何やってんだよ！！」

オルガとシャニは白い機体に集中砲火をかける。白い機体の動きも止まる。
そしてクロトのツォーンが火を噴いた。
白い機体のパイロットにはスローモーションでそのビームが見えた。
人間は死ぬ瞬間、生きていた人生が一瞬でスローモーションのように見えるという。
しかし、そのビームは白い機体に当たらなかった。
煙が出る。煙が消えると、赤い機体が白い機体の前にいた。

目の前に現れた新たな敵機に、動揺するクロト。
だが、自分達に目の前に立ちはだかるものは全て敵だと理解するまでそう時間はかからなかった。

「何・・・あの赤い変なモビルスーツ・・・？」

「邪魔すんじゃねえ・・・死ねよてめぇら！」

クロトは赤い機体めがけて、ミョルニルを投げつける。しかし、赤い機体には当たらない。
そして、レイダーにサーベルで斬りつける。右手の二連装砲が爆発する。その衝撃によってレイダーは後方に吹き飛んだ。
その衝撃がレイダーのコクピットに伝わり、クロトの体は激しく揺れた。
続いて、フォビドゥンも赤い機体にフレスベルグを放つが、
赤い機体の後方にいた白い機体が赤い機体のはるか上空にいる。
そして白い機体は自機に装備されている武器を全て発射する。とっさに、
エネルギー偏向装甲を展開させ、ビームを曲げるのだが、実弾レールガンが
何発か直撃しフォビドゥンがぐらつく。そして、ビームサーベルをコクピットに向けて切り付けられそうになるが、
左手で防御するが左手は切られた。
一瞬にして二機の機体がやられ、少々動揺するオルガではあったが、すぐに立ち直り、カラミティのシュラーク、スキュラ、ケーファー・ツヴァイ、トーデスブロックを連射する。
しかし、二機の機体にはかすらず、今度は二機に集中砲火される。
ようやく、フォビドゥンとレイダーが体勢を立て直す。

カラミティが二機の機体に攻撃して、足止めをする。白い機体にレイダーが、
赤い機体にフォビドゥン、と言った形になり彼らは激しく攻撃する。

「ひゃはははは！滅殺！！」

ミョルニルを振り回しながら白い機体にやみくもに攻撃する。
フォビドゥンもエクツァーンとフレスベルグを連射する。
しばらく、それらの攻撃は続く。
だが、長時間、エネルギーを使いすぎた三機はもう、エネルギー切れに近かった。
特にカラミティはもうエネルギーが底をつく。

「なんだよ、もうエネルギー切れかよ！この馬鹿モビルスーツ！！」

「お前がどかどか撃ちすぎなんだよバーカ。」

「んだと！支援してやってたんだから有難く思えよ！クソが、撤退するぜ・・・」

カラミティが戦線から離脱する。下からの攻撃が無くなったということは、
彼らの足止めは無くなり枷が外れたことになる。二機の機体はフォビドゥン、レイダーに向けて猛攻を仕掛ける。
フォビドゥン、レイダーのコクピットから機械音が発する。

「ん？エネルギー切れ？もう終わりかよ・・・」

「ちきしょー！！再・見！！」

二人も撤退するしかなかった。エネルギー切れで戦場で死ぬなんていい笑いものにされるし
洒落にもならないと思ったからかもしれない。

第四話『再戦』

「なんですか、もうへばったんですか。あの三人。」

アズラエルが残念そうにコンピュータの画面を見る。そこには三機の現状が確認できるようになっている。

三機ともエネルギー切れになっているのが分かった。

「ま、次の攻撃で間違いなくオーブはつぶれると思いますし、一時離脱しましょうか、艦長さん。」

「了解しました。おい、撤退だ。撤退命令を出せ。」

アズラエルが座っている椅子を半回転させ右手を顔にあて、考える。

（それにしても・・あの二機の戦闘能力・・エネルギー切れが無いのか・・？まさか・・・

Nジャマーキャンセラー装備のモビルスーツ・・・？ふふふ・・面白くなってきましたねぇあの二機・・

なんとしてでも手中に収めてやる・・ふふふ）

不敵な笑みを浮かべてアズラエルはその部屋から出て行った。

「三機、収容完了しました。」

スピーカーからオペレーターの声がするとフォビドゥン、レイダー、カラミティの三機は機能を停止させた。

すぐさま、メカニック数十人が三機に近づいていく。

「ぷぅ・・・何なんだよあの二機よぉ」

クロトが先の戦闘で現れた二機のＭＳに苛立ちを覚えていた。
あの二機だけが倒せずに結局は戦線離脱。絶対的破壊を快楽としてるクロトにとってこんな屈辱は初めてだった。
脳裏にビームライフルの銃口が向けられるのが映る。思わず周りの機器に拳を叩きつける。
自分だけじゃないほかの二人もそうだと思うとクロトはコクピットハッチを開ける。
外から出てヘルメットを外して初めて気づいたがスーツがびしょびしょに濡れている。

「うわ・・気持ち悪りぃ・・・」

クロトはリフトから下りるとシャワー室に行くことにした。

「シャワー室に行かねぇか？」

オルガから誘いの声がかかってきた。
クロトはうなずき、二人でシャワー室に行くことにした。

「オーブ侵攻作戦のほうは順調なのですかな？アズラエル理事」

アズラエルの後ろでこのイージス艦の艦長がアズラエルに問う。
アズラエルが笑みを浮かべながら答えた。

「順調と言えば順調ですね」

「あの三人の調子のほうはどうですかな？まだ試作段階で情緒不安定らしいですが・・・」

「さぁ？結局は兵士なんて単なる戦争の道具ですからね。使えるか使えないか。ただそれだけでしょ？」

イージス艦の艦長は少し驚く。兵士をただの道具でしか見ていない人間をこれまで見ていなかったからだ。
しかし、よく考えてみれば兵士なんてそんなものだ。戦場で死ねばそこで終わりだからだ。アズラエルの言うとおり、使えるか使えないか。ただそれだけなのだ。

「何でいきなり一緒に行こうなんて言ったんだよ？」

「上からの命令でよ。お前とシャニとのコミュニケーションを取れってさ」

オルガはしぶしぶ命令に従ったらしい。

「おい、シャニ！早くしろよ！」

オルガに言われると、少し小走りになるシャニ。
一様、この二人のリーダー格にオルガはなったらしい。

シャワー室に到着すると、オルガとシャニは下半身にタオルを巻いているのに

対し、クロトは巻かずにシャワー室に入る。
「てめぇ！汚ねぇ物見せるんじゃねぇよ！！」
オルガが大声で怒る。
シャニは黙りながらクロトのそれを見ていた。
「二人は小さいから隠してんだろ？ヴァ～カ」
「んだと！！」
とりあえずコミュニケーションは取れているらしい。

「何・・？オーブが交渉したいですと・・・」
眉間に皺を寄せてアズラエルが苛立ちながら連合の士官に言う。
「今更何を・・」
聞く耳を持つかと言わんばかりにその士官を手を軽く振り追い払う。
ネズミでも追い払うかのように。
士官はその意味が分かったのかそこで礼をして部屋から出て行く。
歯軋りしながらアズラエルが目の前にあるマイクでこういった。
「これより・・オーブ軍軍事基地オノゴロ島を攻撃します。ＭＳ各パイロットは発進を準備してください。」

＊

それぞれの巡洋艦に搭載されている連合軍正式量産型ＭＳ「ストライク・ダガー」が起動する。
そして、あの三機も。
全ての機体はイージス艦のＭＳハッチが開くと同時に再び戦場に駆ける。
その中で戦闘を仕切ったのがクロトが搭乗するレイダー・ガンダムだった。

「あいつらぁ・・・・」

オノゴロ島に到着した時には大天使の天使達がそこにいた。
そしてクロトに屈辱を与えたあの２機のＭＳも存在した。
クロトは笑みを浮かべる。その瞬間戦いの火蓋が落とされた。
レイダーは左手にミョルニルを装備して二機に突撃する。
他の二機も散開してＭ１アストレイを狙いだす。
キラ・ヤマトが乗る蒼白の機体フリーダムガンダムがレイダーに一人攻撃を開始する。

「キラ！」

「アスラン、あの黒いガンダムは僕がやる。」

赤い機体ジャスティスガンダムのパイロットであるアスラン・ザラもそれに応え、味方機の損害を抑えるため、
孤立したフォビドゥンガンダムにターゲットを移す。
フォビドゥンのコクピットからターゲットされているアラームが鳴る。

「あぁん・・・？へぇー、まだ居たんだ。変なモビルスーツ・・・」

「うぉおおお！」

ジャスティスの右手に持たれたラケタル・ビームサーベルがフォビドゥンのニーズ・ヘグと重なる。
バチバチッとスパークが現れた瞬間お互いにバックパックに装備されているビーム砲と誘導プラズマ砲を発射する。
近距離でのことだったためか、両者共回避が間に合ったがいくつかの損傷が見られた。

「クスッ・・・」

シャニがほくそ笑えんだ。

その頃、砲撃戦用機体カラミティガンダムは二機のガンダムにてこずっていた。
それはムウ・ラ・フラガが乗るエール・ストライクガンダムと兄弟機種でザフト軍のディアッカ・エルスマンのバスターガンダムであった。

「しつこいんだよお前ら！」

「おらおら！行くぞぉぉ！」

「くそ！数だけ多いぜ・・」

ディアッカの機体は中々カラミティガンダムを狙うことが出来なかった。

ストライク・ダガーがバスターを発見し攻撃し始めたからだ。
エールストライクがビームライフルを二発発射する。
しかし、そのビームは二発ともシールドでガードされる。

「くそ！切が無いぜ・・・」

ムウが愚痴を溢す。やはりこの数ではどうにも出来ないこと悟った。
さすがにエンデュミオンの鷹と呼ばれた男でもオーブが崩壊することが目に見えた。

「こんどはこっちの番だぜぇ！」

カラミティの胸部に装備されているスキュラが火を吹く。
直撃しそうになるが間一髪の所で回避する。しかしスキュラの威力は高く
シールドが融解する。

「ちっ・・・」

ムウがサーベルに切り替え近接戦闘を企てようとする。
いくら攻撃力が高くたって所詮は砲撃戦用ＭＳ。近接戦闘は得意ではないはずだと思ったからであった。
カラミティに接近されさすがのオルガも緊張する。だがその攻撃は届かず再びシールドで防御された。
がシールドに装備されているケーファー・ツヴァイに貫通してシールドが爆発する。

「うらぁぁぁぁ！！！！！」

オルガが叫ぶと同時に両足に装備されている接近戦用コンバットナ

イフを右手に持って
エールストライクのコクピット付近に勢い良く突き刺す。
エールストライクがすかさずカラミティの腹部を蹴り飛ばしそこから離れる。
カラミティはオノゴロ島の格納庫に倒れた。

「くそ・・・！」

コクピット付近に刺され内部はかなりスパークを起こしている。ムウも軽傷だけでは済まなかった。

「おっさん！やられたのか・・・？」

ディアッカがそれに気づくとストライク・ダガーを撃破してエールに駆け寄る。
ムウがディアッカと共にアークエンジェルへと帰還する。オルガはそれを黙ってみるしかなかった。
そして起き上がり再びＭ１アストレイに目標を変更した。

第五話『お仕置き』

「ええ！？オーブを離脱しろと・・・？」

アークエンジェルの艦長、マリュー・ラミアスが驚愕した。

「このままではオーブが占領されるのも時間の問題です。あなた方だけでも宇宙へ上がってもらいたいのです。」

オーブ代表ウズミ・ナラ・アスハが硬い顔をする。

「ではウズミ代表はどうするのです・・？」

「・・・・・・」

「・・判りました。アークエンジェルはカグヤに！全員撤退！」

「クサナギも準備を急げ！M1隊も収容を早めろ！」

そこへオーブ次期首長カガリ・ユラ・アスハが涙を浮かべそこにいた。

「嫌！お父様を置いてけなんか行けない！！」

カガリが泣きじゃくりだだをこねる。そしてウズミの平手がカガリの頬に飛んだ。

何が起きたか解らないような顔でウズミを見つめる。

「解れカガリ。お前が死んではオーブに明日は無い。」

ふっと笑いカガリに告げた。

「心配するな。お前は一人ではない。姉弟がいる」

カガリにその写真を手渡す。そこにはカガリの母とカガリの赤ん坊の時の姿ともう一人同じくらいの年齢の男の子いる。

「・・・・！これって・・お父様・・」

「キサカ！この馬鹿娘を頼んだぞ・・・」

「・・・・はい・・」

キサカは無理やりにカガリをクサナギの元へ連れて行った。

クサナギの中で再びカガリは涙を流し、ウズミに泣き叫ぶのだった。

そしてイージス艦にいるアズラエルはアークエンジェルとクサナギがマスドライバーにいる所を発見した。

「何やってるんですか！！逃げられちゃうじゃないですか！」

「キラ君！アスラン君！」

「解りました、援護に向かいます」

キラがうなずく。

マリューも発進準備が出来るまでの護衛としてフリーダムとジャスティスを呼びつける。

「ちっ！逃がすかよ！！」

クロトはフリーダムを追撃する。

「逃げるの・・・？」

シャニも同じように追撃。そしてオルガもカグヤに搭載されているアークエンジェルを狙い始める。

「おいおいおい！マズイんじゃねえか！？」

トリガーを引くオルガだったがフリーダムに邪魔をされ、また後方に吹き飛ばされる。

「うぉお！」

「やめろぉ！もう僕達を放っておいてくれ！」

フォビドゥン、レイダー、カラミティの三機にターゲットを絞り込む。

フリーダムの全武装が三機に発射される。

先の戦闘で駆動系が鈍り回避運動が間に合わない。ビームや弾丸の雨は三機に直撃する。

三人の機体は中破してその場で機能を停止した。

そしてアークエンジェルとクサナギは発進準備が完了した。

フリーダムとジャスティスはアークエンジェルに収容されて艦ごと宇宙へと発射される。

「今は駄目でも次の時代がやってくれる・・・」

ウズミは呟くとマスドイバー及びモルゲンレーテの工場ごと自爆スイッチを押した。

ボボボボボ！！連続した爆発がカグヤを飲み込みモルゲンレーテの工場も破壊された。
カグヤの側にいた三機も吹き飛ばされたがパイロットは無事だった。

アズラエルは再び歯軋りして二機の戦艦が暁の空へ消えるのを眺めた。

破壊された工場。焼け残った管制塔。瓦礫の渦巻く部屋の中で数人の整備が焼け残ったパソコンを
使ってなにやらデータを引き出していた。そこには金髪のスーツを着た男が足を運んでいた。
男も自らその作業員達を手伝うかの用にキーボードを叩く。

（ウズミめぇ・・・よくもまぁここまで・・・）

オーブ代表、ウズミ・ナラ・アスハ。彼の手によって連合軍からオーブを守ったかのように思えた。
しかしその代償は重く、オーブは崩壊。さらに、ウズミ自身も爆発に飲み込まれその遺体すら見当たらない。

アズラエルが使うパソコンの画面に先の戦闘で活躍していた、２機のＭＳが映る。じっと見つめる。

機体の運動性などが数値的に表示される。

「やはり、核エネルギーを使ってますね・・・」

アズラエルがしばらくキーボードを叩く。そのうち一人の兵士がアズラエルに報告を知らせにきた。

兵士はアズラエルの前に立つと綺麗な敬礼をする。

「何ですか？」

「ここの施設に地下があるのを発見しました。研究ラボのようです」

アズラエルがパソコンの電源をすぐさま切る。そして目を大きく開き兵士に問いかけた。

「どうなんですか？」

「爆発はあったものの、いくつかの設備は存在してます。」

「ほぅ・・・」

「こちらです」

アズラエルは兵士についていくと、エレベーターを使い地下一階に移動した。

兵士が胸ポケットに入れていたカードキーを使い分厚い扉を開けた。

アズラエルがその中を見ると数人のガスマスクをつけた科学者がいた。

アズラエルもエレベーターの中ですでにガスマスクを着用していた。

周りを見渡すとなにやら液体やガラスなどが散らばっている。何か

の研究をしていたらしい。
かなりの数の大きなカプセルなどがある。
一人の科学者がアズラエルに話しかけてきた。

「データまで破壊されていますが７０％は修復してます。」

「何のデータですか？」

「見たら驚きますよ・・・」

アズラエルは科学者の後に続いて奥にあるパソコンの画面を見た。
成人男性のシルエットを移している。
そこには興味深い研究データがあった。

「これは・・・・」

アズラエルは驚くと科学者にこのデータの修復を急ぐように命令した。
科学者はうなずくと再びキーボードに手を置いた。

「おい！レイダーの間接がガタガタだ！予備パーツをもってこい！」

先に大破した三機の修復を急いでいる。カグヤの自爆を近距離で受けたため大掛かりな作業を
しなければならなくなった三機はまずフレームから直さなければならなかった。
回収した三機は一時的に各装甲を外して剥き出しになっている。
それは人間の骨を連想させる。

徐々に三つの機体は確実に修復していく。

「で、パイロットの方はどうなったんだよ？」

「・・・・悲惨だぜ？見たいのかよ？」

「いや・・・・」

一つの個室に3人のパイロットが悶え苦しんでいる。
先の戦闘で任務に失敗した三人は“罰”を受けていた。その“罰”はあまりにも見るに悲惨だった。
γ－グリフェプタンが切れた三人は極度に酸素が欠乏、精神が蝕まれる感覚。
それは地獄の苦しみであった。

「がぁぁぁぁぁ！！」

三人の苦しみは絶頂を超えた。
あまりにもの苦しみに泣き出すクロト。気絶することも出来ない。
なぜなら脳には体にダメージが来てるのが判らないからだ。薬の効果で脳が麻痺状態にあるからである。
引き裂かれそうな痛み、吐き気、頭痛。皮膚が剥き出しになってるようだ。
思うように呼吸が出来ない。
そして苦しみは続いていく。

「あの三人は懲りたようですね・・・」
数十分してやっとアズラエルが三人の部屋にやってきた。
「どうですか？調子は。」
笑いながらアズラエルは三人に問いかける。
「く・・薬・・・」
「仕方ありませんね。次、失敗したらこんな事じゃ済みませんからね。」
そう言うとアズラエルは三人に一つずつ薬を渡す。
そうすると三人はその錠剤を急いで飲んだ。
数秒すると体の震えが止まってしだいに落ちつきを戻した。
「ああ。そうそう、君たち。」
「？」
「あの２機のＭＳに勝ちたいかい？」
２機のＭＳ。そう、それはあのザフト軍の新型高性能ガンダム。フリーダムとジャスティスの事だ。
３人の目つきが変わる。
クロトが口を開いた。
「勝ちたい・・・勝ちたい！」

「ふふふ・・分かりました。月の本部に行ったら君たちに新しい力を与えますよ。」

そうしてアズラエルは部屋から出て行った。

第六話『新しい力』

月面。マスドライバーを使い宇宙に上がった三人は月面基地に到着した。
そこは兵器の残骸や微かに油の香りがした。

「殺風景な場所だぜ」

クロト達は月面基地内でシュミレーション訓練を行っていた。レイダー、フォビドゥン、カラミティの三機はコンピューターの中で華麗に宇宙を舞う。
彼らにとって宇宙戦闘は初めてだったためか少々ぎこちなかった。

「うらぁ！瞬殺！」

クロトの搭乗しているレイダーの鉄球、ミョルニルがポリゴン型のストライク・ダガーを撃破する。数分の時が流れ、次に出てきたのは戦闘データから解析されデータ上最高のスペックと力を持ったフリーダムガンダムが相手になった。

「は！行くぞ行くぞ行くぞぉ！」

オルガの乗るカラミティの攻撃が特に目立った。スキュラ、盾型２連装ビーム砲と連続した攻撃を繰り返すカラミティ。
が、さすがに最高レベルのＭＳ。
やすやすと当たるわけが無い。
だんだんと苛つきを覚えるオルガ。

「何やってんだ！ヴァ～カ」

クロトはミョルニルを回転させながらフリーダムに近づく。
案の定フリーダムのほうはビームを撃ってきたが、鉄球によって阻まれた。
一瞬動きが止まり、そこにフォビドゥンの実弾レールガンがフリーダムの背中に直撃した。フリーダムはぐらつき、レイダーが攻撃する。

「はぁ・・・爆殺！」

頭部のビーム砲、ツォーンを直撃するフリーダムだった。
その瞬間、ポリゴンのフリーダムは崩壊して消えた。

「はいはい。終わりですよ三人共。上がって良いです」

クロトはコクピットから下りて、自室に戻ろうとする。
上を見上げるとガラス越しにアズラエルが居た。
彼の顔を見ると、大人の汚さ、身勝手さ、そして憎悪が自然と沸いた。

数時間前、彼らは再強化を受けた。
それはオノゴロ島で入手したデータを元にここで作られた薬品だった。

アズラエルが行ったのは、彼らに『新たな力』を与えたことだった。

そして三人の体にそれが注射される。
彼らの体にはいろいろと心音機やら何やらつけられている。

「あぁ・・あああああ・・・」

三人は自分が自分で無くなるような感覚に襲われた。何かに神経を蝕まれるような感覚。
ある意味、γ－グリフェタンが切れたのより苦痛だったかもしれない。
激しく、体を上下に震わせ痙攣する三人。

「これで、彼らにもっともっと、動いてもらえますねぇ・・・」

「自分はこんなやり方は気に入りません。」

反論したのはマリュー・ラミアスと対立していたナタル・バジルールだった。

「ほぅ？ずいぶん直接ですね？」

「あなたは兵士を何だと思ってるのですか？彼ら三人はモルモットじゃないのですよ。」

「ふぅーん。君は試験もなしに使ったこいつを三人にいきなり使った事を怒ってるんですか・・？あなた、勝てる戦いしかしない人でしょ・・？」

「・・・っ」

ナタルは言い返せなかった。本当のことだからだ。
ここで反論したら自分の立場が無い。そう思ったのだろう。
アズラエルこそ、『汚い大人』の例そのものだ。ナタルは思った。

「それに、相手はコーディネーターでしょ？滅ぼすべき存在なんです。
徹底低にやらなきゃいつ、殺されるか分かりませんヨ？
この戦争は終わりませんヨ。これ、常識ですよね？艦長さん。」

数分たって三人はいつの間にか気を失っていた。
最初に目が覚めたのはクロトだった。
鎖に束縛された肉体が解放されたかの気分で清清しい。
クロトは上着を着て、その部屋から出て行った。

数人の科学者が満足げに三人を見た。そしてこう言う。

「おい、後でシュミレーションをするから忘れるなよ。」

連合の士官がそう言うと、クロトは睨みながら通路に出た。
少し歩くと、小さなベンチがそこにあった。
クロトは腰をかけて、上着のポケットに入っている携帯電話を出すと、
中にあるゲームを起動させた。
右手の親指を巧に扱いながらシューティングゲームを行う。
しばらくして、携帯の画面に『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』の文字が現れると、
クロトは電源を切って窓の外を見た。
無限に広がる宇宙の景色は、星が散りばめられて綺麗だった。

「あ～あ・・早く戦いたいな～・・また」

クロトは立ち上がって、シュミレーションルームへと足を向けた。

戦闘シュミレーションも終わり、クロトが自室に戻ろうとすると
オルガが壁に寄りかかって待っていた。

「てめぇ、腕を上げたじゃねぇか？」

オルガは彼の力を認めたのか、親指をぐっと立てる。
クロトはそんなオルガの仕草に微笑して、彼も同じように親指を立てた。

一方、シャニは目障りな二人を見て別の方向から帰ろうと思うが
二人に気づかれ、渋々、彼らと行動を共にした。

第七話『ドミニオン』

「アークエンジェルの居場所が分かりました。どうします？」
若い連合のオペレーターがナタルに言った。
「強襲をしかける。全員、戦闘配置につけさせろ。」
躊躇しないで答えるナタルに対して少々、怖かさがあった。
昔のクルーが乗っている艦でも容赦ない。それがナタルだ。
オペレーターは艦内に通達できるマイクを口に近づけて、配置につくように
放送を入れた。
それを聞いたクロト達もデッキの方に向かった。
ＭＳの準備が整うと、クロト達はコクピットでアークエンジェルに
接触するまで
待った。クロトは早くフリーダムとジャスティスを破壊したかった。
クロトに屈辱を与え、つまらない敗北を与えたあの２機を。
「早く早く早く・・・腸が煮えくってるんだよ。」
足をカタカタと揺らし、爪を噛むしぐさをする。
「準備は良いか？」
ナタルの顔をが現れて作戦の説明を始める。
アークエンジェルに強襲を仕掛けるのはフォビドゥン、カラミティ。
奇襲を仕掛けるのは高速戦闘が得意のレイダーに任命された。

「では、健闘を祈ります。」

ナタルは敬礼すると通信を切った。３機の機体のフェイズシフトが発動して、灰色だった色が鮮やかになる。
先に、フォビドゥンとカラミティが発進した。レイダーは前の二機がある程度戦闘したあとに出撃しなければならなかった。
クロトはまたしても焦る。操縦桿を握る手が震える。恐怖は自然と感じはしなかった。
数秒すると操縦桿を握っている手の震えが止まって緊張していた脳も冴えた。
γグリフェプタンの効果なのだろう。

「あ・・アークエンジェル？」
アークエンジェル級一番艦の艦長、マリュー・ラミアスが驚愕した。
自分の艦とそっくりの戦艦が目の前に映り出されている。

「識別コード・・アークエンジェル級２番艦『ドミニオン』です」

そこに、一つの通信が入った。

「お久しぶりですね。ラミアス艦長」

「ナタル・・！」

まさか昔のクルーと戦争をしなければならないとは思わなかった。
これも運命なのか、マリューは思った。

「このような形でお会いすることになるとは・・残念です。」

「そうね・・」

「本艦の性能はご存知のはずです。」

ナタルはマリューに精一杯の説得をする。

昔のマリューだったら投降を考えていたかもしれない。あくまで推測だが。

「アラスカでのことは聞いております。――ですが、どうかこのまま降伏し、軍上層部でもう一度話しを！

――私も及ばずながら弁護いたします」

その意味がマリューには分かった。しかし、ここまで来たらもう引き下がれないのは分かっていた。

「アラスカだけでの事じゃないの。私達は、地球軍自体に疑念があるのよ」

「ラミアス艦長・・・」

「よって降伏はしません」

「敵との戯言はいいですから、早く叩いてあげなさい！」

アズラエルがナタルとマリューの話に割って入ってきた。

「不沈艦アークエンジェル、今日こそ沈めて差し上げる」

そう言って通信を切った。アズラエルが笑みを浮かべた。

アークエンジェルの中で全員が凍りついた。

「あ・・アズラエルってあのブルーコスモスの？」

「仕方ないわ・・アークエンジェル取り舵４０！イーゲルシュテルン、スレッジハマーで牽制！」

「いいですねぇ・・面白いじゃないですか。ねぇ？」

ナタルは何も答えなかった。アズラエルは不満そうな顔をしたが、再び笑みを浮かべた。

「ゴッドフリート！てぇー！」

かつての仲間同士の戦いが始まった。

そして、ジャスティス、フリーダムも出撃する。

「来たな白いのぉ！」

オルガのカラミティがフリーダムに猛攻を仕掛ける。

「こ・・こいつら、前とは何かが違う・・・」

アスランが驚いた。それもそのはずだった。彼らはもうナチュラルではないのだから。

フォビドゥンのフレスベルグが弧を描くように発射された。

上からの奇襲攻撃にジャスティスはシールドでそれを防いだ。

ビームコーティングされたシールドは壊れずにすんだ。

いくら強化訓練されたナチュラルでも、こんな反応は出来るはずが

無い。

「この動き・・コーディネーターなのか・・・？」

フリーダムのパイロット、キラ・ヤマトが勘づいた。
こちらの機体の方が性能も高いはずなのに、いまだに食いついてくる。
しかもこちらの攻撃に反応しては回避して、すかさず致命傷与える場所へ命中させようと
反撃する。ナチュラルの反応にしては明らかに変だ。
もしや、なんらかの方法でコーディネーターと同等の能力を得たのか？

「アスラン、この人たち、コーディネーターだ！！間違いないみたい！」

「何！！」

アスランとキラは二機のＭＳの連携をかいくぐりながら、反撃を始めた。

「クロト・ブエル！レイダー、発進するぜ！」

威勢良くドミニオンからＭＡ形態で発進した。そして、宇宙に出ると無重力感があった。２回転しながら戦場の真っ只中にその身を入れた。

「あの艦・・落とす！」

レイダーは二連装機関砲を発射しながらアークエンジェルに奇襲を

仕掛けた。

「何事！？」

「奇襲です！・・・わ！」

アークエンジェルの目の前にＭＡ形態のレイダーが横切る。

「イーゲルシュテルン発射！敵を近づけさせないで！」

レイダーはＭＳ形態に変形すると頭部のツォーンをアークエンジェルに発射する。
しかし、アークエンジェルのラミネート装甲のおかげでその攻撃は貫通しなかった。

「デカブツよりあいつらだ！」

フリーダムとジャスティスに目標を変える。クロトは思いっきりペダルを踏み
急速に２機の元へ行く。
フリーダムとジャスティスのコクピットから警報音が鳴る。

「真後ろ！？」

フリーダムは回等してビームライフルの銃口をレイダーに向けた。

「へ・・へへ・・いっぱいいるねぇ・・撃殺！」

ミョルニルをフリーダムに投げつけるが、回避される。
そしてミョルニルがレイダーに戻ると同時にフリーダムのキックが

レイダーに直撃する。

「のわぁ・・・」

レイダーは大きく仰け反った。そして、アスランが駆るジャスティスのファトゥムのビームがレイダーに当たった。

「なんだってんだよ！」

クロトが声を出した。
ジャスティスとフリーダム、アスランとキラの息のあった攻撃で押される三機。
決着は意外に早かった。
アークエンジェルの攻撃がついにドミニオンに致命傷を与えた。

「・・・・これ以上は無理です。」

「は？まだ始まったばかりでしょう、艦長さん」

アズラエルはナタルの態度に苛ついた。

「本艦はすでに５０％以上のダメージがあります。これ以上の続行は無駄死ににつながります。」

「ああ。そうですか・・分かりましたよ」

アズラエルはイラついたが、本艦の指揮はナタルにあったので言い返せなかった。
しぶしぶ、彼は撤退命令を出した。

第八話『鍵』

「君にはまだ、働いてもらおうか・・」

呼吸を整えて、男が少女に言った。その男こそ、全ての根源でもあるザフト軍の隊長格、ラウ・ル・クルーゼその人である。
彼は捕虜となった元アークエンジェルのクルーである、フレイ・アルスターに
一枚のディスクを渡した。

「最後の扉だ」

不気味にラウが笑った。

「ちくしょう、畜生！まだ、やれたのに！！」

ドミニオンの艦内でクロトの言葉が言霊した。
怒りに内震う。

「おい、出撃まで体を休ませておけ、こいつが修理が終わり次第な」

メカニックがレイダーを親指で示す。クロトは怒りの形相でメカニックを睨み付けた
その顔を見ると、そのメカニックは軽く怯えて帽子を軽く下げた。
クロトは無言で廊下にでた。そして床に軽く両足を開いて座った。

先の戦闘で三機とフリーダムによって撤退させられるほどにダメージを与えられた。
クロトが出撃してほんの2～3分の事だった。唯一の戦果と言えば、フリーダムの頭部を破壊したくらいであった。
しばらく、クロトはボーっとしていた。数分たってからドミニオンの艦長
ナタル・バジルール少佐がクロトの前に立った。

「どうした、ブエル少尉」

半分、虚ろだった目もナタルの出現によって殺気だった目に変えた。

「どうしたも・・こうしたもねぇよ！なんで撤退させたんだ！俺はまだやれたのに！」

クロトの罵声がナタルの耳に届くと、ナタルはクロトの襟をつかんでその場に立たせるようにして
クロトの頬を思いっきり叩いた。
クロトはしばらく何が起きたのか解らないような目をしてナタルを見つめた。
やっと状況が飲み込めたのか自分の頬がジンジンしたのが解った。

「あにすんだよ・・」

「貴君は自分の命を何だと思っているのだ？」

「・・・あ？」

「それが解らないのなら少尉はいつまでたっても、あの2機には勝てませんよ」

ナタルは言いたいことを言うとすぐに隣にあるブリッジ直通のエレベーターのボタンを
押した。エレベーターのドアが開くとナタルはクロトの方を微かに見て中に入りドアを閉めた。

「何のために戦うのか・・・？」

クロトはこの言葉の真意を考えた。

「Ｌ４から離れる様子がありませんね」

ドミニオンのオペレーターがナタルに険しい顔をして言った。

「あの３人の準備が整い次第、再び攻撃を開始する。」

「へぇー・・艦長さんって意外と御節介なんですね」

アズラエルが茶化したがナタルは動じなかった。
ドミニオンの修理が大体、終わりガンダムのほうも完全に完了した。
その頃、艦内の廊下で佇んでいたクロトもナタルに言われたことの意味を飲み込めた。

「殺らなきゃ殺られるのはこっちなんだ・・」

唇を噛みながら、ナタルの言葉を思い出す。
腹が立った。

（何なんだよ？あのお節介女は！！）

再び、アークエンジェルとドミニオンの戦いが始まった。

「今度こそ・・・落としてやる・・」

カラミティの中でオルガが呟くとカラミティの武器を一斉に発射させた。

しかし、カラミティの中で警報音が鳴り響く。

「なんだぁ？ザフトのやろうか！」

「アークエンジェルの前方にザフト軍を確認。挟み撃ちにされました！」

「前門の虎、後門の狼って所ね・・・」

「で？どうするのマリューさん？」

エターナルに所属する砂漠の虎の異名をもつ、アンドリュー・バルトフェルドが冷や汗を掻きながら言った。

「ザフト軍を突破します。ヴェサリウスを攻撃して！」

「敵艦の大将を討つおつもりか・・エターナルも続くぞ！」

レイダーはクサナギ艦に攻撃を開始する。案の定、Ｍ１隊も出撃した。

「やらせないよ！」

Ｍ１隊の隊長、アサギ・コードウェルがレイダーに３対１の状況を作り出す。

「女？うざいな・・抹殺！！」

コーディネーターになったクロトにはもの足り無かったが何かを破壊する衝動を抑えられずにＭ１隊に猛攻を仕掛ける。

ミョルニルがＭ１アストレイに直撃すると、アサギの体を大きく揺す振る。

次にジュリ・ウー・ニェン、マユラ・ラバッツのＭ１もレイダーの攻撃によって中破する。その間、

わずか１７秒。クロトにとって最高の撃退速度であった。

「ちっ・・女が乗ってるんじゃ壊せるかよ・・」

クロトは変形してアークエンジェルへと向かった。

「はぁぁぁ！」

アークエンジェルに最初に攻撃を仕掛けたのはシャニ・アンドラスだった。

シャニのニーズヘグがアークエンジェルの左翼を貫いた。

小規模の爆発が宇宙を輝かせた。それに気が付いた３機のジンタイプがシャニに攻撃をしかけた。

「誰？俺を殺そうとする嫌な奴は・・・」

フォビドゥンのフェイスマスクの両目が不気味に赤く光った。

リフターを展開させフレスベルグを発射し２機のジンが閃光にさせ

た。

「う・・うわぁあ！」

残ったジンがマシンガンを乱発する。シャニはすばやくシールドを展開させて
ジンに間合いを詰める。そして至近距離で両腕のアルム・ファイヤーを発射してジンのコクピットを破壊する。
コクピットを破壊されたジンは宇宙を漂う屍と化し、爆発はしなかった。

「アークエンジェルはやらせない！」

キラ・ヤマトのフリーダムとオルガのカラミティが激しい攻防を繰り広げていた。
フリーダムはエターナルに搭載されている「ミーティア」とドッキングしていたが、オルガは孤高に攻めていた。

「いくらデカブツになったてぇ！！」

プラズマバズーカを発射しながらミーティアのミサイル攻撃をシールドで防いだ。
そして、ミーティアの大型ビームサーベルが展開されカラミティに突撃する。

「危ねぇ！」

間一髪のところで回避したオルガ。しかしシールドは貫かれ使い物にならなくなった。

「ちっ！」

胸部のスキュラを発射したが、ミーティアには当たらなかった。

「楽しい勝負が出来そうだぜ・・！」

オルガが笑みを浮かべた。

しばらくして、ザフトから両軍に通信が入った。

「両軍に告ぐ、ザフト軍で拘束中の捕虜を返還する」

ラウの声が宇宙空間に響くと、全ての戦艦は静止した。

ヴェサリウスから救命ポッドが射出された。

「何ですか？あれは・・」

アズラエルが不思議そうな顔をしてポッドを見た。

「はぁ！」

フリーダムのミーティアがカラミティの右腕を切り裂いた。

「マジかよ！？」

キラ・ヤマトはカラミティの右腕を切り落とすとそのままカラミティを通り、ドミニオンにターゲットを移した。

ヴェサリウスから射出された救命ポッドが宇宙に漂ってるのを発見した。

「なんだ？あれ・・」

キラはフリーダムのメインカメラを使いそのポッドの中身を確認するために拡大させた。
そしてキラが見たものは行方不明だったフレイの姿だった。

「ザブナック少尉、戦闘行為を中止して帰還してください。」

コクピットの中でオルガは呼吸を整えて言われたままに行動した。

「フ・・・レイ？」

キラは信じられない目でフレイを見た。行方不明だった少女が無事な姿で目の前にいたからだ。
すぐに回線を合わせてフレイの声を聞こうとした。

「フレイ！フレイ！」

「キラ？うそっ・・・」

フレイも同じようにキラがいることを信じることが出来なかった。
キラは死んだはず。ずっとそう思ってきた。
次にフレイのポッドのモニターが映り、キラの姿を確認することができた。

「キラ！キラッーーー！」

ハッチ越しにすがるフレイを見てキラは安心した。

「人が入ってる？中身が少し怖いですけどねぇ・・。」
アズラエルはザフト軍の得体の知れないものに戸惑いを隠せなかった。
「あ、アークエンジェル！早く！」
いつまでたっても回収されないフレイは危機を感じたのか、大声で叫んだ。
「か、鍵をもっているわ！」
アズラエルは反応した。
「鍵？鍵ってなんです？」
興味が出てきたのだろうか、すぐに回収を命じるように、隣にいるナタルに命令した。
「ザブナック少尉、それを回収しろ」
カラミティのコクピットで冷ややかな声がオルガの耳に入ってきた。
「あぁ？なんで俺が・・・」
しぶしぶオルガは救命ポッドを回収しようとした。
「フレイ、今助けるから・・」
フレイのポッドに手が伸びる。しかし、フレイの顔が急に変わりキラに後ろ、と言った。

時すでに遅く、背後からレイダーのツォーンが直撃して左翼が破壊された。
次にフォビドゥンのニーズヘグが振り下ろされそうになるのだが、間一髪の所でそれを回避した。

「キラ！もう無理だ。下がれ！」

不意にアスランの注意が聞こえたが、キラは諦められなかった。
アスランはその行為を見てキラに罵声をした。

「一人で突っ込む気か！？」

「僕が・・守るって言ったから・・皆を・・・」

キラは悲しい顔をして、撤退を余儀なくされた。

フレイ・アルスターはドミニオンに保護された。

第九話『ニュートロンジャマーキャンセラー』

「へぇ、君が？」

無遠慮な顔を突き出されすくみ上げるフレイ。
アズラエルは彼女の怯えに注意を払うことなく唐突に質問した。

「で、鍵ってなんなの？ホントウにもってるの？」

フレイは驚くと、大切に持っていたディスクをアズラエルに手渡した。
アズラエルは面白そうな顔をしてフレイを見た。

「誰から、もらったの？」

「く・・クルーゼ隊長・・仮面をつけた・・」

「ふーん・・・」

一瞬、アズラエルは何かに感づいたのか目を大きく開いた。
ナタルも同様に目を開く。

（それじゃぁ、この少女、あのラウ・ル・クルーゼの所にいたんだ）

「ナルホド・・・」

フレイが艦内を見渡すと見覚えのある顔が目にはいった。

「っ・・バジルール中尉！」

「久しぶりだな。フレイ・アルスター・・大丈夫か？」

ナタルの顔を再度確認すると、フレイはくしゃくしゃの顔になってナタルに飛びついてきた。
予期せぬことだったのでナタルは慣性のまま背後へ飛ばされる。フレイはナタルの胸にしがみついて、
まるで幼児のように泣いた。
ブリッジに上がっていた3人はその光景を目にした。

「ふぅん・・結構可愛いじゃん。泣き顔がさ・・！」

シャニはクスっと含み笑いをした。

「お前・・サディスト？」

オルガが突っ込みをいれる。シャニは動じなかった。

自室に戻ったアズラエルはすぐにパソコンを立ち上げてディスクを挿入した。
見慣れた機体の設計図が出てきた。フリーダム・・ジャスティスといった順番で。

「もしかしたら・・・・・」

そのまさかであった。フリーダムとジャスティスに搭載されているシステム。
Nジャマーキャンセラーのデータを見つけた。

「見ろ！僕はいつも正しい！あの2機が鍵だって言ったじゃないか

！」

アズラエルは椅子から勢い良く立ち上がって子供のようにはしゃいだ。

「いやったあぁぁぁ―！！」

ドミニオンは一時、月面基地に戻ることになった。体制を建て直すためである。
クルー達は第2次戦闘態勢を取って休息していた。つまり常に気を張っていることである。
クロト達もそれぞれの自室に戻った。立て続けに戦闘を行ったためかクロトは睡魔に襲われ、
そのままベッドに倒れるようにして眠りについた。

数時間が経過したか月面基地に到着した。

「起きろよ、着いたぜ」

オルガの声が聞こえてクロトは目が覚めた。

「・・・・・あぁ。眠っちまったのか・・・今、起きるよ」

「俺は先に行ってるから早く来いよ」

オルガはその部屋から出て行った。クロトは寝ぼけた顔をして携帯電話の電源を入れた。
そして、クロトもまたその部屋から出て行った。

「ニュートロンジャマーキャンセラーのデータを手に入れたのは確

かに大手柄だよアズラエル。しかし・・・」

隣にいた軍首脳の一人がためった。

「うむ・・核で総攻撃・・・というのはいささか・・・？」

固い顔をしてアズラエルに問いた。

「それよりも、深刻なエネルギー不足の改善に役立てるべきだとは思わないかね？」

もう一人の軍首脳も核攻撃を躊躇う。

「このままだとユーラシアのみならず我が国も凍死者が増えるばかりで・・」

問題を先送りする軍首脳達の態度にアズラエルが怒る。

「ナニを言ってるんですかぁ！皆さんは！！」

「しかしだな・・」

まるで子供に叱られるような親のような感じだった。

「だいたい・・撃たなきゃやられちゃうでしょ！この戦争はコーディネータが敵なんですよ！？徹底的にやらなきゃ！」

「・・・では聞くが、君のところにいる秘蔵子とやらにコーディネーターのＤＮＡを投与したらしいが・・・？」

痛いところを突かれたアズラエルだったがすぐに開き直り弁解した。
「勝つために戦争をしてるのですよ！？今までに失敗してきたから、あの憎たらしい奴らの力に頼るしかないんですよ！
誰のせいだと思ってるのですか？」

「う・・うむ・・」

逆に図星を突かれる。

「何のために高いお金を払って、作ってると思うのですか！？使うためでしょ！？だったら使わなきゃ損でしょ！
だいたい、核なんて前にも撃ったじゃないですか！なんで今更躊躇うのですか？」

「いや・・あれは君たちが・・・」

一人の軍首脳が呟くが、アズラエルが睨みつけ、喋るのを止めた。
部屋の中が沈黙する。

（こんな奴らに任せておいたらだめだ！いつまでたったて戦争が終わりはしない！
変わりにこの僕が、全て僕がお膳立てしなきゃならないんだ！）

躊躇う理由がどこにある？青き清浄な世界を作るためにはあんな突起でたものはイラナイ。削るだけなんだ！
僕をコケにした奴らに復讐するんだ！そうさ！いつだって僕がトップじゃなきゃならないんだ！

「サァ。さっさと撃ってさっさと終わらせてくださいよ。この戦争

を」

「カラミティの右腕パーツの件なんだがな・・・余剰パーツが間に合わないな。」

先の戦闘で切り裂かれたカラミティの右腕をどうするかについて整備員達が議論をしていた。その中に、オルガの姿もあったが話には入っていないようだ。

「０２のパーツを使いますか？あれならここに一機だけありますけど・・・」

０２とはＸナンバーシリーズの２００系統フレーム、「ブリッツ」の事だ。
初期Ｘナンバーシリーズには一様、１号機の予備パーツとして保存されている。

「駄目だ。フレームが合わない。元々、こいつは１００系統だ。」

しばらくの間。彼らに沈黙が出来た。
そして、ついに若い整備員のジョン・コーウエンが口を開いた。

「なら、あれ使いますか？最近、手に入った大量の余剰パーツ。ほら、宇宙に行くとき持ってきた・・・」

「なるほど・・確かにフレームは１００系統だ。問題はないな。」

「あとは０２の『トリケロス』を改造すれば時間は掛かりませんし、カラミティにもそれなりの近接用武器が必要かと・・・」

「解った。すぐに取り掛かれ。出来るだけ早く済ませるんだ。」

オルガは欠伸をするしかなかった。

第十話『火炎』

火の海。宇宙に綺麗な火の花が一つ一つ咲いていく。
花の種をつれて来る蝶は感情をいれずに“それ”を撃つ。
たった数秒で鉄壁の城は燃やされ、壊された。
そしてそこにあった城は跡形も無くただの石の塊になり廃墟とかす。
「あっという間だねぇ、ザフトの自慢の要塞もさぁ」
ザフトの難攻不落と言われたボアズ。それが、たった数秒で落とされた。
核攻撃の範囲外にジンが数十機が生存していたが、三機のGによって落とされていった。
その中、ナタルだけがアズラエルの行為に対して反感を持っていた。
「アズラエル理事は――敵軍に核を撃つことに対してなんとも思わないのですか？」
アズラエルは一瞬、ナタルの方を見て不思議そうな顔をして話し出した。
「軍人さんの口から出るとは思わなかったな・・まぁ、勝ち目の無い戦いに出すよりよっぽど優しいと思うけどね。僕はさ」
ナタルは言い返せない。ただ、黙って宇宙の花を見るしかなかった。
「さ、次は本国だ。さっさと終わらせましょうよ。さっさと・・・ね？」

ドミニオンに着艦した三人は強烈な吐き気に襲われた。次に苦しみと痛みが体に伝わってきたのが解った。
薬が切れたのだ。
クロトはそれに耐えられずに、ＭＳから下りた瞬間に吐いた。目の前にいた、
科学者がすぐにγ－グリフェプタンを与えた。クロトはそれを飲み干した。
惨めだった。いくら力をつけて、敵を倒し、快楽を食らっても、この痛みと苦しみからは逃れられず、
人の力を借りなきゃ生きていけない体に絶望する。
痛みが治まり、体の振るえが止まると不意に自分の手のひらを見つめた。

「情けないぜ・・・」

クロトは呟くと、スーツを脱いで自室に戻った。

彼は再び自分の手のひらを見つめ、さらに体臭をも嗅ぐ。
嫌なにおいがした。汗などの独特の臭みではない。
血の匂いだった。実際にクロトに血が付いているわけではないのだが
クロトには血の匂いがした。
死を恐れず、今までつまらない勝利をもたらし、そして快楽を楽しみ
何十、何百のＭＳに乗った人間を殺した。彼に殺され死んでいった
者たちの呪いのように血の匂いがするのだった。

「最っ低・・・」

クロトは呟き、自分の手を洗面台で必死に洗った。

「少尉、ブエル少尉。聞いてるのか？」

ナタルの作戦説明にクロトは面倒くさそうな顔をしてナタルの方を向いた。

「へぇへぇ、どうせ”あれ”を撃てば終わるんでしょ。それに～俺達に作戦なんていらないでしょ。敵を撃滅すればいいだけだし～。あんたらは薬をくれりゃぁいいんだよっ」

ひねくれた言い方をするクロト。確かに彼らにとって作戦なんていらない。ただ敵を撃破することしか興味が無いからだ。

「口を慎みたまえ、ブエル少尉。これでも私は上官だ」

ナタルは冷静に忠告した。クロトは腕を頭の後ろに組んで欠伸をした。

作戦の説明が終わると、はしゃぎながらＭＳに向かった。

「な～に調子に乗ってんだよ、ターコ！」

「うるせぇ！俺の脚引っ張ったらどうなるか解ってんだろうな！？」

「さぁ？教えて欲しいぜ・・！」

クロトが格納庫に来たとき、レイダーの装備が変わっていた。

「あぁん？ハンマーが無い！」

レイダーの特徴とも言える、破壊球『ミョルニル』が無くなっていた。その代わりに、
レイダーの背部に大型の剣を2本背負っている。近くにいた、整備士にクロトは文句を言った。

「おい！俺の機体の武器が変わってんだけどさぁ！？」

「ハンマーなら装備解除しましたよ。今までのデータから見て、ハンマーは使いずらそうでしたからね。

ですので今回はあの装備で行ってもらいます。すみません」

整備士が最後に誤ったのでクロトは諦めるしかなかった。さりげなく、ハンマーは気に入っていたのだが、
確かに扱いにくい事はクロトは認めていた。

「ぷ・・はははは！」

オルガがこらえ切れずに笑い出した。クロトに睨まれるとオルガは自分の愛機の方に飛んでいった。

「エネルギー消費を軽減するために、ジェネレーターを新型に換装してありますので、少尉の腕だったら扱えますよ。」

この整備士は他の奴らと違ってクロトの事を生体ＣＰＵとして見ずに一人の人間として見ていた。
クロトにはそれが解った。そして改修された愛機のコクピットに向かった。

「カラミティ、行くぜ！」

ドミニオンから射出され重力の無い空間に足を踏み入れた。
オルガのカラミティに続いてフォビドゥン、レイダーも発進した。
レイダーが発進されたのを確認するとカラミティはレイダーの背中に乗った。

「乗りにきぃぜ・・」

「じゃあ下りろよ！」

レイダーの背部に装備されている対艦刀が邪魔で思うように乗れなかったがカラミティのOSが働きやっと姿勢制御が出来た。

「では、皆さん。行って下さい。」

アズラエルの言葉と同時に核ミサイルを積んだガンバレルの“ピースメーカー隊”が発進した。
コーディネーターを撃ち滅ぼし青き清浄な世界を作る、思いを込めて。

「あれ狙うよ！」

クロトがレイダーのアフラマズダを2門発射すると、カラミティの両肩のシュラークも放つ。
しかし、レイダーの攻撃は当たったがカラミティのは回避された。

「はずれぇ！ヘッタクソ！」

クロトは茶化してMS形態になる。

「使ってみようかな！・・・斬殺！！」

２本の対艦刀をもって、ジンに攻撃を仕掛けた。ジンはこちらに大型のビーム砲を放ったが、回避され両断された。真っ二つになったジンはそのまま爆発した。

「いいね！これさぁ・・・！」

クロトは次なる獲物を求めて単独行動に入った。
一方、シャニはドミニオンに近づく敵機を燃やし尽くしていた。

「また、見たいからね・・・綺麗だからさ・・」

笑みを浮かべた。

「うらぁあああ！」

オルガの気合いのセリフと共に、右手の４門あるビームが発射される。その光弾に貫かれたシグーは爆発した。
次に、２機で連携を取りながらザフトの量産型主力兵器、『ゲイツ』がカラミティに猛攻をしかける。

「相手は、接近戦が不向きな機体だ！やれるさ！」

ゲイツは左手の盾形ビームサーベルをカラミティに振りかざすが、カラミティの右腕の
トリケロスＡから光が延びて剣となりその攻撃を防いだ。
そして、コクピットにその剣を刺して蹴る。ゲイツは爆発する。もう一機のゲイツは

今の攻撃を見てビームライフルに装備を変更するが、時遅く、カラミティに急速接近されて胴体を真っ二つにされた。
鬼神の如き強さを見せつけカラミティはストライク・ダガーと交戦していたゲイツを
左手のケーファー・ツヴァイで撃ち抜いた。しかし、その流れ弾がダガーのシールドに当たる。

「き・・気おつけろ！」

「トロトロしてんのが悪いんだろうが！」

「アンドラス少尉、ブエル少尉、ザブナック少尉、“ピース・メーカー隊”のミサイル攻撃の援護をお願いします」

若い女性の士官の声がした。あの少女だ。

「うぃ～っす！」

やる気の無い返事を返すクロトだった。近くにいた、ジン3機を一瞬で切り裂き、残った一機もツォーンで撃破された。
シャニはリフターを展開して、フレスベルグを発射。予測不可能なビームの軌道にいたザフトの小隊は簡単に撃破される。

「・・へへ・・」

オルガも胸部と両肩のビーム砲3門を発射してMSを破壊。そのMS達の母艦を確認すると
トリケロスAの合計4門の砲口からビームサーベルを形成して、艦の中心を貫こうとする。対空防御をするが、

トランス・フェイズ装甲に弾き返されて、その中の艦長は息を呑んだ。大きな爆発が出来た。
ある程度、プラントまでの道を作った三人はエネルギー切れに近くなり、すぐにドミニオンへと帰還した。
そして、ピース・メーカー隊のミサイル攻撃が始まった。

「あのミサイルを落とせ！プラントに近づけるな！」
ザフトで戦陣を切ったのはＧＡＴシリーズ“デュエル”を駆るイザーク・ジュールであった。
デュエルには見なれない装備が装着されていた。”アサルト・シュラウド”と呼ばれる外部装甲で
フルアーマーシステムに酷似している。肩にミサイルポッド及び、”シヴァ”と呼ばれるレール・ガンを装備。
重量増加が見られ、運動性能は落ちていると思われがちだが、
実際には外部装甲の各部ブースターのおかげで逆に上がっている。
イザークは肩のレール・ガンを連射してメビウスを落とす。しかし、あまりの数にイザークはてこずるのだった。

「お前ら如きにそいつらを落とさせるかよ！？」

時機がターゲットされコクピット内で警報音が鳴る。
イザークはレーダーを確認するとデュエルの後方からレイダーがＭＡ形態で突撃してくるのが分かった。

「何だ！この忙しい時に！？」

レイダーはＭＡ形態からＭＳ形態に変形するとデュエルに攻撃を開

始する。自慢の大剣を振るい、
デュエルを2、3回斬りつける。デュエルの装甲がえぐれた。
「死ね死ね死ね！ひゃはは！！」
レイダーのシュベルトゲベールがデュエルに振り落とされた。しかし、デュエルの盾でそれを防いだ。
イザークはコクピットの中で舌打ちをした。
「うぉおおお！！」
イザークが罵声するとデュエルの各種ブースターを使いデュエルを横回転させサーベルでレイダーを斬りかかる。
しかし、レイダーはそれを時機の大剣で防ぐ。
その時、イザークのコクピットから警報音が鳴った。イザークは息を呑んだ。
「プラントに・・・！」
プラントにメビウスが突入した。イザーク達の防衛ラインを突破して。
誰もがやられると思った。閃光が起きた次の瞬間に奇跡が起きた。
数秒、ビームの雨がメビウス部隊に降り注いだ。プラントにミサイルは落ちず、宇宙空間で迎撃された。
イザークは光を放った方向を見ると、そこには自分を裏切った人間がそこにいた。
そして、自分の顔に忌々しい傷をつけたあの連合のパイロットも。
「ジャスティス、フリーダム！」

「ここは俺たちに任せろ。イザーク」
聞き覚えのある声がした。アスラン・ザラだ。かつての親友はザフトを寝返り、あの“足付き”の下についたのか。
イザークはアスランを睨むように回線を開いた。

「礼は言わんぞ」

イザークは遠まわしに、感謝を述べた。彼なりの感謝の言葉なのかもしれない。
一方。見慣れた機体の出現により、クロトの感情は高ぶった。
レイダーはシュベルトゲベールをミーティアにドッキングしたフリーダムに振るう。
キラはミーティアに装備されている大型ビームサーベルでそれを応戦する。

「回線は１５６７２だ！」

「！？」

キラは言われた回線を右手にあるコンソールに入力して開いた。
そうすると、無線から少年の声が聞こえた。

「てめぇがこれのパイロットか！」

「何故こんなことを平然と出来る！？
プラントに核を撃てば戦争はいつまで経っても
終わらないじゃないか！」

フリーダムの右手にビームライフルを装備させ、レイダーに2発撃つ。
レイダーはそれを回避するが一発はシールドに被弾した。
「知らないね！僕達は命令どおり動いてるだけだからさ！」
フリーダムは後方に下がり、ミーティアのミサイル攻撃をレイダーに放つ。
さらに、フリーダムの全装備をレイダーに集中砲火する。
クロトはバーニアペダルを全開にして、
攻撃を紙一重で回避してフリーダムの死角からシュベルトゲーベルを突き刺そうとするが、
それをジャスティスに邪魔された。
「てめぇ！」
「キラ！ここはデュエルに任せて、ミサイルを迎撃するぞ」
ジャスティスとフリーダムは推力を最大にしてレイダーを振り切ろうとする。
レイダーは2機を撃破しようと必死に追いつこうとするが、ミーティア装備の二機の速度に追いつくことは皆無だった。
「逃げんのかよ！くそったれ！」
クロトは視界から消える二機を見届けると、コクピット内で舌打ちをして後方にいる青色のＭＳに目標を変えた。
しかし、クロトはコンソール画面にある機体のエネルギーを表示するゲージが半分以下になっていた。

「あ？エネルギー切れかよ！！」

クロトは一旦、補給に戻ろうとＭＡ形態に変形してその宙域を離れた。しかし、デュエルが逃がすか、
と思い、右肩のシヴァを連射する。
レイダーはその攻撃をかわすと、目の前にいたゲイツ２機を両翼にある７６ミリ機関砲を連射してゲイツ２機を瞬時に破壊した。
イザークは黒いガンダムが宙域を離脱することを確認するとプラントに攻撃を仕掛けている、
ピースメーカー隊に再び猛攻を奮った。

第十一話『光の一撃』

「三機収容を確認。」

フォビドゥン、レイダー、カラミティがドミニオンに着艦するとパイロットはすかさず降りて、研究員から薬物を貰う。
いつもの錠剤型のものではなくて、首筋の欠陥に直接刺すものだった。
プシュっと音がするとパイロット達の体が落ち着いて、今にも出撃できる体になった。

「おい！何故やつらを呼び戻した！？そんな事、ボクは命令してないヨ！」

自分が命令してない無いことを実行されて、
機嫌が悪いアズラエルだったが、自分たちの優勢が解ると、
睨んだ顔はすぐに、他人を見下した顔に戻った。

「あまり、大きな声出さないで貰いたいですね、アズラエル理事。」

「解ってますヨ。十分にね」

ナタルは今の状況を冷静な眼差しで見た。
確かに、今は我々が優勢なのは確かだ。
しかし、考えてみれば、こちらが核攻撃を行えばあちらが黙ってるはずがない。
それは承知の上だ。しかし、何故に反撃をしてこない？
嵐の前の静けさが、ナタルに感じた。

「出撃は15分後だ。忘れるなよ」

三人の目の前で士官が告げてブリッジ方面に向かうと、
クロトは後ろで舌を出してバカにした。
3人はファーストフード型の宇宙食をほおばりながら、時間が来るのを待った。
三人は後、どれくらいで戦争が終わるかを考えた。早く終わって欲しくない。
もっともっと、壊して、殺して、快楽を得たい。
でも、いつかは終わりが来る。

出撃の数分前になって、ふいに口を開けたのがシャニだった。

「ねぇ・・？」

「どうした？」

オルガが聞いた。

「次の出撃で、俺達の中の誰か・・。死ぬかもしれないね・・」

「あん？どうしたんだよ、急に」

「何か、嫌な予感がする。モヤモヤする何かがさ・・」

「考えすぎだぜ？今まで死にそうな目にあっても生き残ってただろ？」

「そうだといいけど・・・」
皆を元気付けようとクロトが話す。
「白けるなヨ。しばらくは、お前らとバカできると、ボクは信じてるけどね。
死なねぇよ、お前らは。だってゾンビだもん。」
笑いながら言うと、オルガは言った。
「あん？ふざけろよ！？」

「何だ！あれは！！」
「来るとは思っていたが・・・まさかこれほどとは・・」
いきなり目の前に現れた巨大兵器を前にドミニオンの後方にいた戦艦郡は一瞬にして海の藻屑と化した。
その威力にドミニオンの艦内に居た全ての者が息を呑んだ。
「ピ・・ピース・メーカ隊、６０％は消滅。後方にいたアガメムノン級、
ドレイク級、ネルソン級は全て壊滅！」
ブリッジの中で空しく、オペレーターが被害を告げた。

「おのれ！ナチュラル共・・・・！」

食いしばった歯の間から、うめくパトリック・ザラ。
みな、あまりのことに動揺しきってまともに考えることが出来ない様子で、
彼をみつめる。

「ただちに、防衛線を張れ！残存部隊は”ヤキンドゥーエ”に集結させろ！」

「あ・・は！！」

議員達や補佐官達は自分を取り戻したらしく、あわただしく動く。

（まさか、Ｎジャマーキャンセラーを連合に売り渡すとはな・・クライン派か？
いや、あの馬鹿者か。役立たずの愚かな息子だと思っていたが・・・・）

パトリックは軽くため息をつくと、ぼんやりとアスランの顔を思い出した。昔は、
昔はと考えていくうちに、自分の後をひよこのように見てきたアスランが自分の国
を売るとは・・
彼には自分が示唆した経路でしかＮＪＣの情報を地球連合に漏れた理由が分からなかった。
あの小娘に熱をあげられて、手も無くだまされたに違いない・・。

「クルーゼ！」

「は！」

「ヤキンドゥーエへ上がる！」

議長自らが前線に立つことを耳にした議員達が、振り返る。パトリックの目にはナチュラルの憎しみに燃えて、血走っていた。

「・・・・ジェネシスを使うぞ・・・」

「まもなく、ジェネシスは最終段階に入る！全艦、斜線上より離脱！」

「部隊を下がらせろ、エザリア！ジェネシスは最終段階に入る！」

「『全軍斜線上より離脱』――――ジェネシス！？」

イザークは以前から極秘裏に開発されていた最終兵器の存在は、一般兵士の間からも噂になっていた。まさか今日それを、使用する時が来たとは・・・呆然とその通信文を見ていたイザークであったが、味方艦とモビルスーツが斜線上から離脱するのを見ると我に返る。赤と白の機体がまだ、斜線上に存在

するでわないか。
イザークはとっさにオープンチャンネルでアスランとキラに叫ぶ。
「離れろ！ジャスティス、フリーダム！！」
「――下がるんだ！ジェネシスが撃たれる！！」
ジャスティスの中でアスランが息を呑む。
敵であるはずの彼が懸命に自分たちに伝えようとしている。
アスランはジェネシスが何かは分からなかったが、イザークが声を張り上げて言うほどの物、相当な物らしい。
「キラ！下がるぞ！」
「分かってるよ、アスラン」
二機の機体はイザークが下がった方とほぼ同じ方向に下がった。

「ザフト軍、撤退していきます！」
アークエンジェルのブリッジでサイが不審げな声で報告する。
「ヤキンドゥーエ後方に大型の物体！これは・・・」
「今まで気づかなかったって言うの・・？」

「フェイズシフト展開」

オペレーターの声と共に暗黒の闇の中から黒い灰色をしていた巨大なミラーが、磨かれた
ように銀色になる。この巨大な物体にはＰＳ装甲が施されており、
さらにはミラージュコロイドで完璧にセンサー、
視界から消していた。
連合から得た技術をフルに使われ、皮肉さも感じる。

「ＮＪＣ起動、ニュークリアカートリッジを単発発射に設定」

「全システムオールグリーン」

「思い知れ・・ナチュラル共！！」

パトリックは勝ち誇った顔で叫んだ。

「この一撃が、我らコーディネーターの創世の光であらん事を・・
！――発射！！」

筒状になったミラー基部の奥、カートリッジの中で核の巨大な力が
弾け、虹色と言っていい閃光が放たれた。
戦場に太く強烈な光が駆け抜けた。斜線上に居た地球連合軍の艦隊は
その白い光にさらされただけで、次々と解け、爆発した。

先ほどまで自分たちが居た場所に強烈なエネルギーが収まると、しばしの間、ノイズが宙域を覆った。

「こ・・んな・・」

キラは声を震わせ、歯を食いしばる。こんな・・こんなことが許されるのか？
何故・・・胸が突き出る感じになったキラ。これではまるで・・子供同士のケンカではないか？やったらやり返し、やられたらやり返す。それじゃ・・・

「ち・・ち・うえ・・」

死にそうな声でアスランは自らの父親がやった行いを見つめた。
――よりよき者を。より強い兵器を。より敵を多く殺すものを――。
これが人類の叡智？夢？
アスランとキラは叫びだしたいほどの思いにのしかかれた。

「――ジェネシス、最大出力の６０％で照射。」

自らが作り、自らで撃ったその兵器の威力に唖然とするが、我に返ったように報告した。

「地球連合艦隊はその五割の戦力を喪失したと思われます」

「冷却開始。ミラージュブロック換装作業、はじめ」

パトリックの後ろにいた、ラウ・ル・クルーゼが笑みを含んだ声で賞賛した。

「さすがですな、ザラ議長閣下」

パトリックが振り向くと、ラウのいつもの猫なで声で続ける。

「ジェネシスの威力が、これほどのものとは・・しかし・・少々、酷では？」

「戦争は勝たねば意味が無いのだ。どんな事をしてでもな」

「たしかに・・」

ラウは返した。

ラウは全て自分の思惑通りに進行していることが最もな成果だと思うと、笑みがこぼれる。

後は自らの手で因縁を断ち切り、邪魔者を排除する・・残る敵は・・。

「ば・・バジルール少佐・・こ、これは？」

恐るべき光の渦を目撃したドミニオンのオペレーターはバジルールに問う。

「浮き足立つな！残存艦の把握を急げ！――旗艦ワシントンはどうなっているか！？」

彼女の鋭い声に、オペレーターは我に帰ったの如く、計器類を確認する。オペレーターは息を呑み答える。

「ワシントンの識別コード・・ありません！」

「クルック及びグラントも応答ありません！」

ナタルは内心愕然とする。主力艦隊はあの”恐るべき兵器”飲み込まれたのだと。

主力艦を失ったことにより地球軍はもとの半数に満たない上に、指揮するものを失って

浮き足をたたせ、混乱している。

ナタルは自分の同様を表に出さないようにチラリと、隣のシートを見る。

案の定、目を丸くし、青ざめたアズラエルがそこにいた。

「信号弾撃て！残存の部隊は現宙域を離脱する！」

第十二話『死』

「無事な艦は早く総攻撃にでるんだ！補給と整備を急げよ！！」

アズラエルが怒りに状況を見失い、適切な判断が遅れないくなっている。

「総攻撃など・・・そんな、無茶です！！」

ナタルは信じられずに、思わず席を立ってアズラエルに詰め寄る。

「現状、我が軍がどれだけのダメージを受けているのか
アズラエル理事にだってお分かりでしょう！」

全体の半数以上を失い、満足に動ける艦も少ない。幸い、ドミニオンに
ダガー隊と三機のGは帰還したものの、あの恐るべき一撃に戦意を喪失している
者までいる。そんな状態で再度の総攻撃など正気の沙汰ではない。

「もうすぐ月から補給も来る！残った核で一気に叩き潰せ！！あいつ等も
出撃させろよ！！」

彼は癇癪を起こして子供のような仕草でプラントに指をさした。

「ヤツラの兵器のほうがもっと野蛮じゃないか！！

あれが次の照準に地球を狙ったらどうなるんだよ！！
撃たれてからじゃ遅い！無茶でもなんでも、”アレ”とプラント！！
絶対に破壊するんだ！解ったらとっとと出撃させろよ！！」

ナタルは両手を硬く握り締めた。その通りだ。地球を撃たせるわけには
いかない。自分たちは軍人だ。そのための捨石などなせばならない事だ。

「じゃ、いくよぉ！！」

フォビドゥン、レイダー、その上にカラミティが乗る様にドミニオンのブリッジ
から出撃した三機は、宙域にいたゲイツ１０機を一瞬で破壊する。
カラミティのスキュラとシュラークの斜線上に爆発がいくつも出来た。
フォビドゥンのリフターから発射されたフレスベルグは生き物の用に動いて
瞬く間に数個爆発が起きる。
レイダーの破砕球がコクピットを貫き、頭部のツォーンで
ゲイツを仕留める。

「こいつら、大したこと無いじゃん！」

クロトが笑いながら言った。

「調子に乗ってるんじゃネェぞ！！」

オルガも負けじと言う。しかし、背後から少しの衝撃が襲う。
ジンがバズーカをカラミティに放ったのだ。
カラミティはビームサーベルを形成して、ジンのコクピットを貫く。

「へ、ザコが」

もっともっと快楽を得ようと思ったのか、オルガは小隊を崩して
単独行動にはいる。

「どこ行くんだよオルガ！」

クロトは小隊を崩したオルガを呼び戻すが、オルガはそれを聞かな
かった。
舌打ちをすると、シャニと共に爆発が多い空間へと向かう。

一方ドミニオンでは、戦慄がはしっていた。それは、ジェネシスの
第二射で
月艦隊が全滅された事を入電されたからであった。

「ば・・馬鹿な・・」

思わずアズラエルが口を開ける。
ナタルも悟った。
自分たちは負けたのだと。目の前にはあの白い大天使がいる。
月の艦隊がやられたのでは、三機のGを呼び戻しても意味が無い。
もはや、戦う意味など無いはずなのに。
ナタル自身の戦いもここで終わったように思えた。
艦内は自然と静まり返る。

投降しよう。艦の全員がそう思った。しかし、その中で

「撃て！撃たなければやられるぞ！！」

全員がギョッとした。これほどまでの大打撃を受けて直も攻撃をしよう

と思う奴がどこにいる。アズラエルの言葉は絶対だ。

ブリッジの全員がナタルの顔を見た。

「くっ・・・！ゴッドフリート照準！」

「てぇーー！！」

大天使とそれに瓜二つの黒天使は鏡のように合わさって

そして、砲声が鳴り響いた。

「あいつら・・！！」

シャニは見慣れた機体を見ると興奮状態に陥った。

クロトもついで攻撃を開始する。

「はぁあああああ！」

フォビドゥンのエクツァーンがジュリ機のＭ１アストレイのコクピットを貫いた。

さらに、その隣にいたマユラ機を湾曲したニーズヘグで貫く。そしてリフターを

展開してフレスベルグを放つと、アサギ機を爆散させた。

「やるねぇ～・・」

一瞬で三機もの機体を撃破されカガリは悲鳴する。

「ジュリ！？マユラぁぁ！！」

「お前も死にたいのかぃ？ならそうさせてやるよ！！」

レイダーは一瞬、動きが止まった桃色の機体をシュベルトゲベールで切り裂こうとする。当ると思ったが盾で弾き返される。常人離れした動きをした桃色の機体に右手の機関砲を発射する。

「め・ざ・わ・り！！」

桃色の機体は盾を捨ててビームライフルを可能な限り撃ち続ける。レイダーは変形してそれをかわす。桃色の機体はライフルを捨てて、サーベルに切り替える。レイダーもそれに対応してＭＳ形態に変形を戻し
大剣を構える。両者は機体を互いにクロスさせるように抜ける。カガリは
クロトのシュベルトゲベールを一つ破壊した。

しかし、ほんの一瞬気を抜いたカガリは思いがけない敵に狙われた。警報音を鳴るほうを見るとリフターを展開して今にも発射するフォビドゥンの姿
があった。盾を捨て、防御できない状態にあった。
カガリは息を呑む。やられると、全身の毛が逆立てられた瞬間、数秒経っても

爆発は起きなかった。カガリを守った機体はアンチ・ビーム・シールドを掲げて
防いでくれたのだ。
味方が守ってくれたのだと思ったカガリは恐る恐る、目の前を見る。
なんと、彼女を救ってくれた機体はザフトの”デュエル”だった。

「えっ・・・・・？」

カガリはぽかんと口をあけて、かつては敵として交えたのに、今は
当然のように
彼女をかばい、フォビドゥンにビームを連射しているところだ。

「なんで・・・なんで・・・なんで・・・・」

シャニがブツブツとコクピットの中で呟く。

「なんで・・死なないんだよ！お前はぁぁぁぁ！！！」

「くっ・・・・！」

イザークは辛うじてフォビドゥンの攻撃を交わすとビームサーベル
に装備を変更
して、対応するも、Ｇパンツァーでタックルすようにデュエルを吹
き飛ばす。

「ディアッカァ！！」

「Ｏｋ・・任せな！！」

ディアッカが乗るバスターの超高インパルス超射程距離狙撃ライフ

ルと
両肩のミサイルポッドが火を噴いた。
だがそれは、フォビドゥンには当らず、レイダーが破砕球を回転させそれを防御した。
「ダメでしょ！君たちはボクの相手をしてくれなきゃ！！」
フォビドゥンとレイダー、デュエルとバスター。４機の機体は息のあった攻防を
開始する。レイダーが切り裂き、フォビドゥンが防ぐ。次世代機のほうがバランスの
いい仕上がりになっているため、次第にデュエルとバスターが押されていく。
「イザーク！このままじゃ・・・」
「わかっている！！」
「うわあああああ！！！！」
罵声と共に、フォビドゥンはリフターのビームを立て続けにデュエルに打ち込む。
バスターはレイダーの斬撃をかわして、支援攻撃をしかけられない。
思いがけない攻撃に、イザークの動きが鈍る。そして、ビームの雨はデュエルに直撃した。
その光景を見たカガリは悲痛な声を上げる。
「・・・へへへ・・」
シャニはほくそ笑む。クロトもバスターの胸部に蹴りをお見舞いす

る。
次の瞬間、爆発の中から、外部装甲をパージしたデュエルが躍り出た。
ビームサーベルを2本構え、フォビドゥンのGパンツァー二つを切り裂く。

「ち！やらせるかよぉ！」

レイダーはフォビドゥンの前に出て、自分の大剣でデュエルのサーベルを
まじあわせる。イザークは一旦距離を置くために離れる。

「逃がすかってんだぁ！！」

クロトはそれを追撃する。しかし、距離を置いたのは離れるためではなかった。
それに気づいたときは遅かった。レイダーのコクピットの中で警報音が鳴り響く。
バスターだ。バスターのライフルが構えられ、レイダーに放たれた。
クロトは自分が死ぬなど思わなかった。そんなことは予想もしてなかった。

「うわぁああ・・・！！」

だが、ライフルの放った弾はレイダーには当たらなかった。
当る瞬間、何かに突き飛ばされた。
慣性の法則のまま、突き飛ばされたほうにゆっくりと進む。

バチバチバチバチ・・・

クロトはハッとする。生きていることではない。それは、目の前に今にも爆発する
フォビドゥンの姿が目に入ったからだった。

「シャ・・・ニ？う・・そ・・・だろ？」

無線からシャニの声が聞こえた。

「早く・・逃げろ。馬鹿。へへ・・お前と一緒に馬鹿やってて、楽しかった・・ぜ・・！」

そして、フォビドゥンは爆発した。やっと事実を受け止めたのか
クロトの目から涙が溢れた。

「シャニ！！」

レイダーの動きが止まると、バスターのエネルギーも尽きて、フェイズシフト装甲が
剥げ落ちて、灰色になる。
デュエルはレイダーにすかさず、ビームサーベルで斬りかかる

「敵が怯んだ！今がチャンスだ！」

イザークは叫ぶ。

「お前らさえ・・・お前らさえ・・いなければぁぁぁぁぁ！！！！」

クロトの中で何かが弾ける。
デュエルの攻撃をまるで、フリーダムに乗るキラのように
かわして、レイダーの大剣で左手を切り裂く。

さっきまでと動きが全く違う。洗礼された綺麗な動きになる。

「なに！！」

イザークは戦慄して言った。

そして、レイダーは変形して一度そこから離れて、再び旋回して戻る。

レイダーはすでにエネルギーの残量が残り少ない。そのため、コクピット内で

警報音が鳴り響く。

デュエルのほうも同じだ。ビームサーベルを2本失ったデュエルにはもう頭部の

バルカンのみ。ビームライフルもエネルギーまじかで使い物にならない。

ビームサーベルの一つはフォビドゥン、さっき切り裂かれたついでに爆発して

予備はもう無い。イザークは焦る。バルカンではあの機体を倒せる訳が無い。

残された手を考える。イザークの目に、バスターの合体した狙撃ライフルが映る。

「そいつを貸せ！！」

デュエルはバスターから無理やり奪うと残りのエネルギー全てを使って

それを放った。その瞬間、デュエルの鮮やかな青色は徐々に灰色になった。

これをかわされたら、打つ手は無い。イザークは思った。

その一筋のビームはレイダーの左の全部分を貫いた。

「・・！？」

辛うじて推進剤に火はつかなかったが、そのまま回転してデュエルの横を
通り過ぎた。イザークは内心、やったと思うと、
そのまま、静止した時を過ごした。

レイダーもその宙域から離れたくらいの場所でやっと動きを止めた。
全エネルギーが尽きて、こちらも装甲の色が灰色になる。
クロトの瞳は悲しげに白色になっていた。
糸の切れたマリオネットのようにパイロット席で座っていた。
白色の瞳からは一筋の涙が流れた。

「ボクのせいで・・シャニは死んだ・・」

（何泣いてんだ？）

クロトにしか見えなかったかもしれない。
クロトの目の前には死んだはずのシャニが立っていた。
シャニは優しげにクロトを見ている。

「シャニ・・ごめんよ・・ボクがボクがもっと落ち着いていたら・・
」

（お前のせいで・・ドジ踏んじまったよ。けどな・・）

シャニはそっとクロトの頬をなでる。

「暖かい・・・・」

（じゃあ・・俺はもう行くぜ・・）

シャニは後ろを振り向いて、どこかを目指すように歩き始める。
クロトはそれを必死についていこうとする。

「シャニ！行くな！シャニ！！」

クロトがどんなに悲痛にさけんでも、シャニは歩くのを止めなかった。
かわりに、後ろを向いて言った。

（へへ・・！死ぬんじゃねぇぞ・・・！お前には俺の分まで生きてもらわなきゃ困るんだよ）

「シャ・・ニ・・・・」

クロトは眠るように目をしだいに閉じていった。
いつかまた、シャニと出会うその日まで、クロトは死なない事を決意するのであった。

第十四話『決着』

「えへ・・へへへへ・・見つけたぜ・・白い奴！！」

目の前にいる白い奴。今までトリガーを引いて落ちなかった敵はコイツだけ。
オルガの脳には何かを判断する能力はあまり残されていなかった。
γグリフェプタンの多用。それが彼の脳を徐々に蝕んでいったのだ。
薬の『限界時間』を超えても、直も戦いを止めない。
彼の体中の穴という穴から体液を漏り始める。

「あはははは・・はははは」

無邪気な笑い声と共に、右腕のトリガーを押す。
両肩、胸部からビームを立て続けに撃ちつづける。
あいつを落とせればいい。自分の体がどうなっても・・
彼の機体の中でついに、エネルギーの残量が少なくなり警報が鳴る。
オルガはそれに気づかず、機体を動かし続けた。
白い機体の強化兵装から長いビームの刃が伸びる。それを
カラミティに振り下ろすも、かわす。
ギリギリの緊張感の中、何かが弾ける音がした。
今までよりも、クリアに動ける。

「すんげぇぜこりゃあ！あはははは」

白い機体のビームの刃を紙一重でかわし、右腕の複合兵装防盾から
ビームを
放つ。しかし、ついにカラミティのエネルギーがエンプティを迎えた。

「ピー・・・」

カラミティが糸の切れたマリオネットのように、その動きを止める。
しかし、彼はトリガーを引き続ける。

「何だよ撃てねぇじゃねえか！！！」

カラミティが動かなくなった隙を見たのか、背後から
赤い機体が、強化兵装のビームの刃を伸ばして、胸部を
真っ二つに切り裂いた。
機体が燃える中、彼は自分が死ぬとは思わなかっただろう。
ただ、ぼんやりと次の獲物を想像していただけだった。

クロトの機体の中で、『お仲間』が撃墜されたシグナル音が鳴るも
デュエルとバスターの攻撃をかわすのに集中して、耳には入らなかった。

「でぇりゃあああ！！必殺！！！！！」

「早く、あいつらを沈めろ！！ローエングリン照準！！」

アズラエルの罵声が飛ぶ。

「ダメぇぇ！！」

甲高い声が飛ぶと、フレイはインカムをつかんでアークエンジェルに叫ぶ。

「アークエンジェル逃げてぇぇぇ！！」

その行動に逆上した、アズラエルは内ポケットから拳銃を取り出しその、台尻で彼女を殴った。

フレイはその反動で、後ろのモニターパネルにぶつかり跳ね返る。

そして、アズラエルは拳銃を構えた。

ナタルはとっさに彼に飛び掛り、その腕を押さ込む。

拳銃がブリッジに鳴り響き、火花を散らす。

「何をやっているか！！」

こんな場所で本当に拳銃を撃つとは――

相手は逆に彼女の襟首をつかんみかかる。

「キサマこそ！何のつもりだああ！？」

見開かれた目に血をほとばしり、憑かれたような目をしている

この男を見て、ナタルはとうの昔にすべきだった行動を取った。

「総員、退艦しろ！」

ナタルの言葉がブリッジに鳴り響くと、船員は弾かれたように

その席を立つ。

「貴様らぁあああ！！」

沈みかける船に溜まった、ネズミたちは全力で走り
脱出艇に向かう。
フレイが途方にくれた顔でナタルを見る。

「急げ、アークエンジェルに行け！！」

その言葉にハッと我に返り、急いでエレベーターに向かう。
フレイの手をクルーが引っ張り、戸惑うものの
彼女はナタルの顔を見つめた。
ナタルの顔に優しい笑みが浮かぶ。今までの彼女には考えられなかった。

「クソ！！お前ぇえええ！」

「指揮官だと・・命令する立場だというのなら・・・ぐ！」

ナタルの腹部に焼けるような熱さと痛みが伝わる。
撃たれた。彼女はそれと共に、イスに座り込む。

「ボクにこんな事をして許されると思ったのかぁ！？」

アズラエルは急いでエレベーターに向かおうとする。
ここから脱出しなければ死んでしまう。
彼はそれしか頭に無かったのだ。
ナタルはその言葉に滑稽に思い、艦長席に体を引きづりながら
向かう。

ボタンを操作して、ブリッジを閉鎖する。
アズラエルはエレベーターの前に来て、ボタンを押そうとするものの
目の前にシャッターが下りて、立ちつくす。

「あなたはここで死すべき人だ・・・私と共に」

「なんだとぉぉぉ！」

色白の顔が火山が噴火したように赤くなる。
彼は怒りに身を任せ、拳銃から銃弾を発射する。
その弾は、彼女の右肩を貫いて、鮮血が丸い雫になり飛び散る。

「ふざけるんじゃない！！ドアを開けろおおお！！」

「いい加減・・認めてください。我々は・・負けたのです」

「違ああああう！！」

アズラエルは急に悪鬼の形相で空中にいるナタルを突き飛ばして
射撃指揮官席に飛びつき、操作を始める。

「ボクは・・勝つんだ！！そぉさ・・いつだって！！」

「アズラエル・・貴様、何を！！」

ドミニオンの右舷底部に開かれた砲門から、すさまじいエネルギー
の光が
アーク・エンジェルに放たれた。
それは野望を持った男の憎しみを込めた最後の一撃だった。

しかし・・それは、アーク・エンジェルには届かなかった。
アズラエルは呆然と火花散るスパークのように弾かれているビームを見つめる。

アーク・エンジェルから飛び出した白いボロボロの機体が
アンチ・ビームコーティングしたシールドを構え、それを防いでいる。
だが、いくらシールドでも、このすさまじい威力をもったエネルギーを
防ぐことは出来ず、ついに爆散した。

「う・・あ・・・」

「あなたの・・負けです・・！」

アズラエルは顔を引きつかせ、アーク・エンジェルの右舷底部から
発射される同様の砲台を見る。

（撃て・・マリュー・ラミアス！！）

エネルギーの塊がドミニオンのブリッジを貫く。
二人の体は一瞬で蒸発し、長かった決着はついに幕を閉じた。
アズラエルの野望。コーディネーターの完全抹殺も、アーク・エンジェルと言う
天使に潰されたのだった。

数十分して、ジェネシスは爆発した。
そして、『自由』を駆るキラはアズラエルよりも大きな野望を持っ

た男
ラウ・ル・クルーゼの駆る『天帝』のコクピットを貫いた。
ジェネシスの爆発が二人を襲った。

フリーダムの四肢が無くなり、コクピットの中でキラは呟いた。
「どうして・・こんなところに来てしまったのだろう。
僕たちの世界は・・・。」

クロトは意識を取り戻した。目を開くと天井が見えた。
ここはどこだ？分からない。自分の体に点滴やなにやら付いている。
また、自分の体を改造しているのか。

「目が覚めた？」

目の前に映ったのは、あの『白い機体』に乗っているパイロットの顔だった。

「ここ・・は？うっ・・」

体中が痛い。自分はてっきり死んだのだと思っていた。しかしあのパイロットがここにいる。

「動いちゃダメだよ。まだ、動かせるような体じゃないんだ。」

仕方なくクロトは、体を戻して再び彼を見る。

「見覚えのある機体がコクピットを潰されてなかったから、
もしやと思って、見たら君が居た。死にそうになってたから・・・」
クロトはようやく自分がどんな状況かを呑み込むことが出来た。
「君はあれから2日間、ずっと眠っていたんだ。
僕はキラ。キラ・ヤマト」
キラ。それがこいつの名前なのか。
クロトはキラの名前よりも『お仲間』の生死が気になっていた。
そんなクロトをキラは優しく問う。
「君の・・名前は？」
もはや自分の本当の名前なんか覚えてもいない。
クロト・ブエル。こんなのも、『おっさん』が勝手に
決めた名前。
「名前は・・知らない。コードネームならあるけどね」
クロトは皮肉に答える。今まで呼ばれてきた名前なんて
偽り。そんな事を言っても、意味がない。真実を言いたいのに・・
「そっか・・でも今まで君が呼ばれてきた名前が『君』じゃないか
な？」
キラは優しい目でクロトを見つめて、再び問う。
「君の・・名前は？」

クロトの目から涙がこぼれた。
今までは『生体ＣＰＵ』『これ』『それ』『化け物共』
そう呼ばれてきた。だけどあいつらは自分のことを名前で呼んでくれた。
名前で呼ばれると自分が存在していることが実感できる。
こいつだって、自分のことを名前で呼んでくれる。

「クロト・・ブエル」

エピローグ（前書き）

エピローグ＋α　収録

エピローグ

C・E71

あれからボク・・いや『俺』はエターナルのクルー
アスラン・ザラと共にオーブに渡った。
俺の体は薬の影響のせいで、思うように動かなくなっていたので
オーブに亡命したドミニオンの科学者達によって正常な体に戻す
手術と養成を行った。８ヶ月間は病院暮らしとリハビリを続けてい
った。
体に残った以上な薬物は、今までに飲んできた薬物の低い物を飲ま
せて
徐々に体に馴染ませていく。これを続けていく。
自分の体が元に戻るとは夢にも思ってなかった。以前よりも記憶が
ハッキリするし
思考能力も薬を飲む以前のままだ。
けど、昔のような『力』を振るう事は出来ないと思う。

・・・病院暮らしで最も辛かったのが、薬を体に馴染ませること。
夜に苦しみがやっきて、鎮静剤を打つまでの時間が過酷だった。

唯一嬉しかったのは、アスランとカガリが見舞いに来てくれること。
合うたびに「やつれたな」って言われる。笑っちゃうよね。
アスランは来るたびに『土産』を持ってくる。
しかも果物ばっかり。たまにはお菓子がいいのに。
アスランは「栄養がつく食べ物がいいんだ」とか言いながら
果物を剥いて食べさせる！しぶしぶ、俺は食べる。
けど、その果物は特別美味しかった。
カガリは「私が剥く！」とか言って、アスランを困らす。

理由は、ナイフをまともに扱ったこともないのに、剥き始めるからだ。
カガリが剥く食べ物はいつもカクカクしてて・・・（苦笑）
退院してからは、カガリのＳＰと役割が決められてた。
アスランの指導の下、拳銃の使い方は前よりも上手になった。

それから、突然、カガリに俺の仲間たちの事を教えてと言われて
オルガとシャニの事を語りだした。もちろんアスランもいたけどね。

オルガは小説が好きだとか、シャニは音楽が好きだとか。
他にもプライベートな事も聞かれたっけ。シャニとの関係も・・・。
オルガとシャニが乗っていた機体の事を話すと、カガリとアスランは重い顔をした。
それから知ったことだった。アスランがオルガを殺した事を。
昔の俺だったら今この場で殺していたかもしれない。でも瀕死の俺を手厚くしてくれたのはこいつらだ。憤怒はしない。
カガリにいたっては、シャニに仲間を殺された。
俺はまさかと思った。あの時壊した『Ｍ１アストレイ』に乗ってたなんて。
カガリは泣きじゃくり、アスランがカガリを抱きしめる。
俺はただ「ごめん」としか言えなかった。

Ｃ・Ｅ７３

戦火は止まない。誰かが止めないければならない。

キラの家で俺は決心した。
俺は再び、戦場に出る事を。
キラは悲しい顔で見つめた。けど俺は、戦いを止めたい。

2年前、キラに教わったことだ。

「もう一度、連合に戻るよ・・俺」

「決心は固いか？ん？」

バルトフェルドと呼ばれる男が俺にコーヒーを手渡した。

「今日のは、自信作なんだがね」

確かに、微妙な酸味と甘さが口に伝わる。

「俺・・俺のような『奴』を救いたいんです」

俺のような奴。つまり俺と同じような生体ＣＰＵ。

「そうか・・」

俺はコーヒーを飲み干すと、外に出てジープに乗り込む。

そして、俺はオーブの慰霊碑に向かった。

目の前の石に刻まれていた名前は

「シャニ・アンドラス」

「オルガ・ザブナック」

この墓はしょせんは飾りにしか過ぎない。この下には
遺品や、体もないのだから。
「俺さ。連合に戻ることにするよ。」
答えは返ってこない。あたりまえだ。
「許して・・くれるよな。」
クロトは言うと、連合軍の格好をした兵士の元に歩いていく。
「もう・・いいのか？」
「ええ。」
「そうか。じゃ、行くぞ」
キーを回して、エンジンをかけると。車は走り出した。
クロトは二人の墓を見つめると、二人が笑ってるような気がした。
（ゆっくり・・休んでくれよな。）
彼は思った。
「今日からお前は、第８１独立機動郡『ファントムペイン』だ。」
連合の将校からクロトは言われた。

クロトは前回の戦果を称えられて、少尉から三階級上がり
少佐に役職が上がる。隣には仮面をつけた金髪の男が立っている。

「よろしく頼むよ。少佐」

仮面の男が言った。連合の兵士にしてはずいぶんと
なれなれしい態度だった。

「全力を尽くします。」

ＣＥ７１年からさかのぼる事、３年前。

Ｃ・Ｅ６８　「ロドニア研究所」

「０２４、前へ。」

赤毛で、すこし丸顔の少年。彼は言われたとおりに、前へ出る。
右手に持っている拳銃を構える。
１５Ｍくらい先に、的がある。少年はその的に当るよう、拳銃で
狙いを定める。

「撃て」

言われたとおりに拳銃のトリガーを引く。

一発、二発・・と弾丸が的に当っていく。
弾倉が空になると、少年は撃つのをやめた。
的の中心より、やや右側に命中していた。
少年をガラス越しに見ていた、研究員達がその成績を
用意していた紙に書き始める。

少年は下がり、また別の少年が入っていく。
彼は次に、白兵訓練を受けるため外に連れて行かれる。
檻のような場所に入れられると、そこには自分と同じように
緑色の服を着た同年代の少年少女がいた。
連合の士官が言った。

「持っているナイフでここに居る奴らを殺せ。でなきゃ、ここから
出られない」

言われたとおりに赤毛の少年は持っているナイフで
他の少年達を切ったり、刺す。
少年の体に赤い体液が飛び散った。
彼は最初に居た数人の少年少女を殺して一人生き残ると
連合の士官が檻の扉を開けた。

少年の名前は無かった。
「０２４」これが彼の名前だった。

昼。
フリータイムと呼ばれる時間が存在する。
彼ら強化人間達にひと時の『自由』を与える時間である。
０２４は一年に一度だけ支給される『遊び道具』で遊ぶ。
ゲーム。これをやっている時間が一番落ち着いた。
フリータイムは大体、１時間くらい。その後はプロテインやその他

筋力増強剤入りの『給食』を食べる。
残した者は『廃棄処分』。それがここの決まりだった。
０２４はここに来てもう８年になる。
彼は戦争で親を失くした『戦災孤児』なのだ。
引き取る場所も無く、やむをえずここに来た形だ。

毎朝、毎晩。彼らは人を殺す訓練をする。
いや、正確には人を殺すのではない。
『人間もどき』を殺すのだ。
ブルーコスモスはコーディネーターを忌み嫌う。
コーディネーターの力を借りず、最強の兵士を作り出す。
薬物強化、肉体改造・・ナチュラルがコーディネーター並の身体能力を
獲得するためだったら手段を選ばない。
それが、ブルーコスモスのやり方なのだ。

０２４はゲームの電源を切ると、ボールを弾ませる音が聞こえ
興味に思い、外に出た。
数人の少年達がボールを使って遊んでいた。
どうやらバスケットボールらしい。
その中、青毛の少年が自分の身長の２倍近くあるゴールにダンクシュートを
決めると、赤毛の少年に笑って言った。

「何だよ？やりたいのかよ？」

０２４は頷くと、青毛の少年がボールを投げて渡す。

「俺を抜いてみろよ！出来るもんならな！」

０２４に対して挑発すると、それに応えるように、ドリブルさせる。
しばし二人は、にらみ合い、数十秒が経過した。
青毛の少年はボールに手を伸ばして、０２４からボールを奪い去ると
そのまま、後ろのゴールめがけてダンクする。

「へっへ～ん！」

青毛の少年は再びボールを投げ渡し、腰を低くして相手が出るのを
待つ。
しかし、赤毛の少年は今たっている位置から、ボールを打つ姿勢に
構え
そのまま、シュートした。
ボールは見事に入り、青毛の少年は驚いた顔をする。

「嘘だろ・・スリーポイント！？」

ボールを弾ませながら、赤毛の少年が口を開いた。

「これで、２対３だな。」

青毛の少年は再び驚く。

「ルール知ってるのかよ？」

赤毛の少年は指先でボールを回し、答える。

「昔、やってた。ここに来る前・・」

悔しそうに赤毛の少年を見ると、今度は青毛の少年に

ボールを投げ渡す。

「次、入れた奴が勝ちだ。文句ないだろ？」

０２４は言うと、青毛の少年は頷いた。
再び、彼らはボールを弾ませ、バスケットを楽しむ。
数分しても決着はつかなかった。しかし青毛の少年に疲れが
見えてくると、０２４はすかさずボールを奪い去り、そのまま相手
側の
ゴールに突進して、シュートを決めた。
青毛の少年は悔しい顔をしたが、笑った。
それにつられて、０２４も笑う。

「ハァハァ・・負けた・・！次は絶対に勝つぜ！！」

「・・・次は瞬殺だからな。腕、磨いとけよ」

二人は息を整えると、自分たちの『巣』に戻った。

「楽しそうじゃないな。これでも読みなさい。」

「０１８」と呼ばれる少年は、彼の事を親しくしてくれる研究員か
ら本を貰った。
すこし分厚い本だったが、生まれて始めて人から物を貰った。
少年は気品のある顔で、二本垂れた髪が昆虫のように思えるヘアー
スタイルが

印象付けられる。すぐに彼はその本を読み始める。
あまりにも熱中したのか、彼はその本に読みふけた。
フリータイムの時は、本の虫になった。
周りの雑音がうるさかった彼は他の静かな場所に移動しようとする。

数人の『お仲間』が彼の元に集まってきた。
いや、『お仲間』と言うのは変かもしれない。
彼にとっては、ただ邪魔なだけの存在。ただ居るだけの存在。
少年達は彼の本をマジマジと見つめると、急に何も言わず本を取ろうとする。
少年達の年齢は、彼から見れば幼い子供。
小さい時に良くあることだ。一度、興味を持った物は手にとって見たくなってしまう。
しかも、質が悪く、回りの事を考えない。
０１８はその行為に対して、怒りを覚え、取った少年を
強く殴りつけた。殴り、蹴り・・・。
そのうち、少年は痙攣し始める。彼は一瞬、やりすぎたと思ったが
自分の大切にしている本を奪った。当然の結果だと、合理的に考えた。
その行為を見て、連合の士官が彼の事を数人でとり押さえる。
彼は暴れるが、士官がスタンガンを当てしずませた。

「危ない奴だ。今すぐ殺すか」

士官が拳銃のホルスターから弾倉を取り出す。
弾を装填し、撃鉄を引く。拳銃を彼の頭に押し付ける。

「貴様の成績はよく聞いているよ。だが、調子には乗るな」

彼は士官を殺す勢いで睨みつける。

士官はニヤ、と笑うと。体を離す。
そして、先に彼が殴りつけた『被験者』を担いで
どこかに連れて行く。医務室だろうか。

（いつか・・殺す）

彼は思った。

＊

「♪♪♪　♪♪♪！！！」

イヤホンからすごい音量がもれている。
彼は周りとは打ち解けず、ただポツンと座っている。
彼もまた、ここの『被験者』である。
緑色の髪に、右目を隠すように髪の毛が垂れている。
目の下にうっすらと隈が出来ている。
彼も名前がない。あるのは被験体の番号のみ。

「♪♪♪　♪♪♪！！！」

デスメタル系、ノイズ系か。分からないが、一ついえるのは
音がうるさい事だ。

『被験者』達にも『自室』と言うものはある。
彼らは一日の『課題』が終わると睡眠をとるためにそこに戻る。
『自室』といっても一人一人あるわけではない。
だいたい7～8人くらいが寝られるスペースを確保してある部屋の
ことだ。
2段ベットが3～4置かれている。男女混合ではなく、別々だ。

「♪♪～♪」

彼のイヤホンからもれる音が激しい音から、優しい歌声に変わる。
この歌が彼は気に入っていた。自分のストレスを奪ってくれる、優しい音だからだ。
その、歌声に変わると決まってやってくる奴がいる。

「お兄ちゃん」

金髪で目色は赤紫。天然顔の少女。
自分のことを名前で呼ぶし、『自室』では同じベットを共有している。
なので彼はすぐに少女の事を覚えた。
『ステラ』といった。

「また・・・・聴きたいのか？」

やれやれ、と思ったのか彼は片方のイヤホンを少女に渡す。
気遣ったのか、音量を少し下げる。
少女はこの音楽を聴いてるときは、いつもは見せない笑顔を見せる。
そして、彼の膝を枕代わりにして眠った。
最初は抵抗感を感じていたが次第に慣れていった。

（・・・寝ちゃったか）

彼はステラの耳から起こさないようにそっと、イヤホンを抜き取る。
そして、ステラの頭を少しなでた。

「ステラ、お兄ちゃんの事・・・好き」

寝言だろうか。

3年の月日が流れ彼らはも『大人』なっていった。
1年前に『血のバレンタイン』が起こり、彼らにもやっと
存在を意義できる場所が出来た。

『戦場』だ。

ブルーコスモスの盟主自身がここ『ロドニア』に足を運んだ。
盟主の名を『アズラエル』と言った。
アズラエルはここで最も成績がよく、手ごろな年齢の強化人間を
選び呼び出す。
それが『彼ら』だった。
彼らはここで会うまでお互いの顔を見たことが無かった。
一人はゲームに熱中し、一人は本を読み、一人は音楽を聴いている。
お互いの存在は認識していたが、興味の対象にはなかったのでスル
ーした。

「記憶操作は順調なんですよネ?」

「ええ。今までの余分な記憶は『削除』しています。変わりに別の
『記憶』を
植えつけています。」

「ほぅ・・それはそれは」

アズラエルは不敵に笑みを浮かべ研究員と話す。

「彼らに『名前』はあるのデスか？」

「いえ・・それぞれに『名前』はありません。番号だけです」

「なら、こちらが勝手につけても文句はありませんネ？」

「ええ。構いません。」

三人にそれぞれ『名前』が付けられた。

赤毛の少年は『クロト・ブエル』

二本垂れた髪をした少年は『オルガ・ザブナック』

最後に、緑色の髪をした少年は『シャニ・アンドラス』

それぞれの姓は『ソロモン72柱の悪魔』から取られている

コードネームだ。『悪魔』とはまさに皮肉である。

彼ら三人は身支度を整えると、外で停車している

連合のジープの元に集まる。

その途中、クロトの目にバスケットで遊んでいる青毛の少年を見る。

青毛の少年の事は見た事はあった。しかし、それだけだった。

『見た事があるだけ』。

『兵器』に余計な感情は必要なかったのだろう。

ステラは廊下でシャニを見かけると、シャニの前に来た。

「行っちゃうの？」

シャニはしばらくステラの顔を見る。

そして、一言

「邪魔・・」

シャニの瞳にステラは映ったが、ステラと過ごした記憶は取り除かれもはや『目障りな存在』としか思えなかったのだ。

ステラは呆然としてシャニを見つめる。

どうしたのだろう。ステラは思った。

エピローグ（後書き）

本当にさいごまで呼んでくださって、ありがとうございました。
引き続き、ヒソカの作品をお楽しみください。

キャラ&機体　設定

クロト・ブエル

本編の主人公。１８歳。

レイダーガンダムのパイロット。
戦闘中は「滅殺」「抹殺」「激殺」など発し、ミョルニル（破砕球）を振り回す。γ－グリフェプタンと言う特殊な薬を使い、死を恐れずに戦う。
劇中ではγ－グリフェプタンが切れ、錯乱状態になりディエルガンダムに撃破された。
本編では元気で明るく、笑顔を絶やさない小悪魔的な一面があるものの、その裏側
には憎悪を蓄えている。コーディネーターを倒すことによって自分の恨みを晴らしつつ
快楽を得ている。ロドニアの研究所に8年間、所属していた。
（ロドニアに居た頃の記憶は一つも残っていないが一種の
記憶喪失状態であるのでステラ等三人のように
何らかのショックで取り戻すことは出来る）

シャニ・アンドラス

フォビドゥンガンダムのパイロット。１８歳。

地球連合軍の3人のブーステッドマンの一人。
戦闘中は口数が少ない。基本的に僚機を僚機と思わず（これは劇中

の3人とも共通ではあるが）。劇中では搭乗機の特徴であるエネルギー偏向装甲使用するとき周りを考えず使い、そのビームがクロトにかすめることもあった。
最終的に誘導プラズマ砲をディエルガンダムに命中させ、撃破したと思ったがそれはディエルの外部装甲をパージしたものであった。
一気に間合いを詰めたディエルがビームサーベルでフォビドゥンの装甲を貫き、死亡した。
彼もまた、ロドニアの研究所に8年間、所属していた過去を持つ。
ロドニアに居た頃も同じように暗い性格で、いつも隅で座りながら音楽を聴いていた。

オルガ・ザブナック

カラミティガンダムのパイロット。19歳。

階級は少尉
ひとたび戦闘になると好戦的な性格に変貌し、快楽的に戦いを愉しんでいた。敵機との射線上にフォビドゥン、レイダーがいてもかまわず砲撃を加えるシーンもよく見られた。
最期はミーティアドッキングモードのジャスティスとフリーダムの連携攻撃で背後からビームソードで斬られ、機体ごと爆散する。
三人のリーダー的存在。非戦当時は本を常に読んでいる。
彼も同様に8年間、ロドニア研究所に所属していた。この頃から既に戦闘狂になっている
又、本を読むきっかけは一人の研究員から渡された子供用の絵本が始まり。
彼は『訓練』が終わると、自室にこもりそれを読んでいた。

ムルタ・アズラエル

反コーディネイターの政治団体「ブルーコスモス」の盟主。また、軍事産業連合理事でもあり大西洋連邦に対して強い発言力を持つ。

先祖代々、ロゴスおよびブルーコスモスの家系に生まれ、幼少期のトラウマによりコーディネイターを強く憎むようになる。またその当時は、自分をコーディネイターにしてくれなかった母親にも、激しい憎悪を抱いていた様である。

ヤキンドゥーエ戦でドミニオンのローエングリンでアークエンジェルを打ち抜こうとしたが失敗。その際、ストライクガンダムがアークエンジェルの盾になりストライクは大破。

ムウは死亡（実際は記憶喪失で生きていた）

マリューの怒りを買い、アークエンジェルがドミニオンを沈め、死亡。

ナタル・バジルール

アークエンジェルの副長を務めていたが、アラスカ基地到着後、転属し、少佐に昇進。ドミニオンの艦長となり、アラスカから逃亡したアークエンジェルの討伐任務を受ける。かつての同僚を敵に回すことに躊躇いを感じながらも、任務遂行を優先し見事な戦術を披露、たびたびアークエンジェルを追い詰めた。

第2次ヤキン・ドゥーエ攻防戦でアークエンジェルと対峙した際、遂に反旗を翻す。全クルーを退艦させ、全身を銃で撃たれながらもアズラエルをブリッジに拘束し、最期はアズラエルを道連れにアークエンジェルが放ったローエングリンにより散華した。

ブーステッドマン

地球連合軍がコーディネイターに対抗するため、投薬、特殊訓練、精神強化などによりコーディネイターと同等以上の身体能力を持たせたナチュラルのことで、一種の強化人間である。

γ－グリフェプタン

カテコールアミンと呼ばれるストレスホルモンに由来する、ドーパミンやノルアドレナリンに似た神経伝達物質（脳内麻薬）に関係のある物質である。この物質は体内で作ることができず、依存性がある。そのため、薬の効果が切れると凄まじい禁断症状に苦しむこととなる。また、γ－グリフェプタンには精神高揚の効果もある。

アドバンステンデッド

クロトら三人に投与した新型薬物でブーステッドマンの更なる強化でＳｅｅｄ（「Ｓｕｐｅｒｉｏｒ　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎａｒｙ　Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｄｅｓｔｉｎｅｄ－ｆａｃｔｏｒ」の略称）を持つことを可能とした新しい強化人間。正式名称が無いため、研究員が
この名称で呼ぶ。大量のアドレナリンとエンドルフィン（脳内麻薬）が同時に起こった時に
発動が可能。
作中では、γグリフェプタンの効力でＳＥＥＤ化していた。

ＧＡＴ－Ｘ１３１『カラミティ』

搭乗者・・・オルガ・ザブナック

長射程の砲戦に特化されたこの機体は「Ｇ」の基本であるＸ１００系フレームを引き継ぐ形で、地球連合軍が独力で開発した指揮・火力支援用ＭＳである。巨大なビーム砲を背負った姿はバスターの後継機と見られるが、搭載された火器はそれを圧倒する。胸部にイージスと同じ「スキュラ」を装備するほか、大出力の砲を多数装備するが、そのかわり格闘戦用の武器はシールドのみとなっている。また、航空能力がないために地上戦ではレイダー飛行形態の背中に乗って出撃する。

重装備のため重量級と見られがちではあるが、機体重量はバスターより抑えられ、同時開発されたレイダー、フォビドゥンの３機の中で一番軽く、さらに腰部に加えられたバーニヤにより機動性が向上しており、ホバー走行で水上を移動することも可能である。また装甲にトランスフェイズ装甲を採用することで、電力消費量が抑えられ、運用時間が拡大されている。カラミティは『疫病神』『災厄』の意

ＧＡＴ－１３１Ａ『カラミティ・アッサルトＴＹＰＥ』

搭乗者・・・オルガ・ザブナック

フリーダムによって破壊され右腕を失ったカラミティを急遽改造した機体。

元々、試験用機体のカラミティを実戦投入させたため余剰パーツが極めて少ない。そのため右腕を復元することができなかった。なの

で右腕はＸ１０４『ストライク・フェイク』の物になっている。さらに『０２ブリッツ』の『トリケロス』を改造して専用の『トリケロスＡ』を装備。これは『トリケロス』の特徴であるランサーダートを排除して３連装エネルギー砲を装着。カラミティの砲撃を一段階上げた。さらに接近戦用のコンバットナイフしかなかったカラミティにビームサーベルが付いたため、近接戦闘も得意となった。バズーカを除外してエネルギー武器を装備したためエネルギー消費量が激しくなり、ジェネレーターも換装した。さらにバックパックにシュラークを装備したエールストライカーを装着してカラミティの欠点だった運動性も大幅に上昇。強襲用機体に生まれ変わったため、アッサルトは洒落で付けられたのかは定かではない。形式番号にＡとつけられているが、これはアドバンスト、「次なる・・」の意。

ＧＡＴ－Ｘ１０４Ｐ『ストライク・フェイク』

ＧＡＴ－Ｘ１０５『ストライク』のプロトタイプ。見た目は普通のストライクなのだが、換装システムに難があったため、換装することは不可。そのためか、フェイクと名がつけられている。これは開発者が皮肉を込めたもの。Ｐは「プロトタイプ」の意。

ＧＡＴ－Ｘ２５２『フォビドゥン』

搭乗者・・・シャニ・アンドラス

特殊兵装を装備できるＸ２００系フレームを持つこの機体は、先に開発されたブリッツとは全く異なるコンセプトを持つ、突撃・強襲用ＭＳである。
ブリッツがミラージュコロイドを使用した隠密行動により敵陣深くに入り込む突撃・強襲・撹乱を主とする戦法を採ったのに対し、フ

ォビドゥンは初期のＧＡＴ－Ｘシリーズに採用されていたフェイズシフト装甲を改良したトランスフェイズ装甲により実体弾を無効化し、エネルギー偏向装甲「ゲシュマイディッヒ・パンツァー」によりビームをねじ曲げる方法を取り、攻撃から機体を守る鉄壁の防御力を備える事により、敵陣に突撃をかけることを目的としている。大型火器は全て背部パーツに集中しており、本体には頭部の「イーゲルシュテルン」と両腕の「アルムフォイヤー」があるのみである。そのため、「エクツァーン」や「フレスベルグ」を使用する際には強襲形態をとる必要があるが、この形態は重力下での飛行が可能となる一方、腕の可動範囲が制限されたり、「ニーズヘグ」を自在に操れないといった不便が生じる構造上の欠点を持っている。
当機の取る戦術はほぼブリッツと同じであり、相手を特殊装備で翻弄しながら単体で敵の中に侵入して味方のために活路を開くというものである。距離を置いての戦いでは並の敵が相手なら多彩な火器で蹴散らせ、それではかなわない敵が相手の場合はその防御力で相手に隙ができるまで待ち続け、接近する。そして相手がうろたえているうちに「ニーズヘグ」で斬り裂く。ただし、他に白兵戦用の武器を持っていないため、間合いが難しい。

「フォビドゥン」は「禁断」「禁忌」の意。

ＧＡＴ－Ｘ３７０『レイダー』

搭乗者・・・クロト・ブエル

地球連合軍が先行開発されたＧ兵器のデータを基に開発した機体で、ナチュラル用のオペレーティングシステムが搭載されている。
この機体は変形機能を持つＸ３００系のフレームを使用しているが、同系列のイージスと異なり変形機構そのものは簡素化された高機動強襲用ＭＳである。

イージスとは違い大気圏内での戦闘を意識して開発されたため、ＭＳ形態でも単体での自由な飛行が可能なだけでなく、ＭＡ形態時には飛行能力のないＭＳを運搬できるように背部にはフラットスペースが確保されている。本編ではオーブ出兵時にカラミティを載せて運んだり、載せたまま攻撃したりなど絶妙なコンビネーションを見せてくれた。さらに、変形機構がシンプルになっているため一瞬ともいえるほどの短時間でＭＳからモビルアーマー（ＭＡ）に、あるいはその逆に変形できるのでＭＡ形態で相手に接近し、その目の前で変形、攻撃するなどの戦法を採ることが出来る。

レイダーは１機ずつ、確実に敵を葬り去る戦法と得意とする。そのためにまずＭＡ形態に変形してその高機動力で敵を混乱させつつ接近、すぐさまＭＳ形態に変形してＭＳ形態ならではの強力な武器で撃破、再びＭＡ形態に変形して離脱するというまさにレイダーの名にふさわしい一撃離脱戦法を得意とする。それは武装を見ても分かるように「ツォーン」や「アフラマズダ」は射撃武器でありながら射程が短い。これも敵機を確実に捕らえて至近距離から発射するコンセプトに作られているからである。

本機には初期のＧＡＴ－Ｘシリーズに採用されていたフェイズシフト装甲（以降ＰＳ装甲）を改良したトランスフェイズ装甲が採用されたことにより、電力消費量が抑えられ、稼働時間が拡大されている。また、武装においてもとどめを刺すために使う「ツォーン」や「アフラマズダ」以外はビーム兵器を採用しておらず、ロングレンジで使用できる「ミョルニル」も言わばトゲの付いた鉄球なのでエネルギーをあまり消費せず、稼働時間の延長に貢献している。

「レイダー」は「強奪者」の意。

ＧＡＴ－Ｘ３７０Ｂ『レイダー・ブレードＴＹＰＥ』

搭乗者・・クロト・ブエル

レイダーの近接用装備。試験的に使用されていた破砕球『ミョルニル』の使いづらさが判明した結果、対艦用大型エネルギー剣「対艦刀・シュベルトゲベール」を2本、バックパックに背負った姿。多少の重量増加があるがレイダーの飛行能力に問題はない。
ヤキンドゥーエ攻防戦でこの形態になっている。かといって、破砕球自体は腰部にマウントされている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5359c/

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ－ブーステッド－

2010年10月9日01時45分発行